

周恩来の誤算

——顧順章事件の真相（承前）

松本英紀

目次

- I 顧順章の「叛変」
 - 1 つくられた事件——党史から見た顧順章事件
 - 2 波紋 i——総書記の逮捕
 - 3 波紋 ii——ノウレンス事件
 - 4 波紋 iii——伍豪啓事事件（以上第五九八号）
 - 5 周恩来と顧順章
 - i 顧順章の登場
 - ii 李立三路線と顧順章
 - iii 顧順章の追放
 - 2 顧順章事件の真相
 - I 顧順章の逮捕（以上本号）
 - 2 董健吾「脱險」記
 - 3 誰が顧の叛変を知らせたか
 - 4 周恩来・張冲・潘漢年
 - 5 周恩来と顧順章
 - i 顧順章の登場
- 顧順章がはじめて周恩来と出会ったのは、一九二七年三月に中共中央

が上海労働者の暴動を計画した時であった。

周恩来は前年の十二月、中共中央総書記の陳独秀に招請され、軍事行動に従事していた広東を離れて上海の党本部に転任してきた。意気ようようと党本部に乗り込むと、予定どおり中央組織部の秘書に就任し、また中央軍事委員会（中央軍委）委員を兼任した。この時、周恩来にはさらに重要な任務が待ち受けていた。上海で大規模な労働者の武装蜂起（上海第三次武装蜂起）を起こし、白崇禧の国民革命軍が上海に到達する前に中共の息のかかった市政府を樹立することであった。今回で三度目の暴動計画であったが、党組織は北伐軍に呼応するためだと口実をつけた。^①

暴動計画の責任者となった周恩来はまず暴動を統率する特別軍事委員会をつくり、周恩来、顧順章、顔昌頤、趙世炎、鐘汝梅ら五人が委員となった（のちに羅亦農、王一飛の二人が加わる）。党中央から能力を買われた顧順章は労働者の武装糾察隊の組織を任命され、その総指揮となって浦東区の戦闘を指揮した。とくに畢庶澄の魯軍が集中した閘北の戦闘では鉄道労働者を指揮して熾烈な市街戦を繰り広げ、その勢いで上海市政府を陥れた。

「上海第三次武装蜂起」では、顧順章は最大の功労者であった。顧順章は一時、周恩来の地位を越えて糾察隊を指揮し、武器の調達から労働者の軍事訓練まで独力で推し進めた。蜂起が成功した後の三月二十三日、党組織は上海市民大会を開き、顧順章は「上海特別市臨時政府」委員、

副市長に当選した。周恩来はこれ以来、すっかり顧順章に信頼を寄せた。唯一残っている顧順章の肖像はこの上海特別臨時政府が成立したときの記念写真である^②。

一方、蒋介石は上海の臨時政府と国民党本部の権力を事実上握った共産党員に勢力に驚いた。その背後で「顧順章と周恩来が指揮する二七〇〇人の労働者軍が作られていた」のを知って、ますます中共への警戒心を高めた^③。

蒋介石は、四月十二日、いよいよ大粛清を敢行して上海の共産党勢力を撲滅した。中共はこの事件を蒋介石の反共クーデター（四・一二政変）といい、国民党は清党運動と呼んだ。

顧順章が労働者の武装蜂起に大きな功績を挙げたのは、労働運動に豊富な経験があり、加えてソ連で習得した特務工作の技術を發揮したからである。ただ、この情報と暴動のスペシャリスト、顧順章の業績は結局、共産党、国民党の双方から叛徒、反逆者と見なされて歴史の記憶から消し去られた^④。

中共政治局委員候補、中共特科の責任者の顧順章が叛変したことは党中央にとって衝撃的な事件であった。党中央は緊急会議を開いて事件の原因を総括した。しかし、周恩来は事件の近因を顧順章の出身階級の資質に求め、遠因を李立三の革命路線に求めるだけで、事件の発生にいたる顧順章の具体的な行動の背景を分析しなかった。事件を総括する会議であったが、真相を究明する場所ではなかった。したがって、周恩来の報告内容には限界があった。顧順章の情報工作を追跡することは、情報工作を決策する周恩来自身の計略を公表することになるからである。

ところが、事件が発生してから十年近くたって、顧順章に関する党の公式見解としての報告書が書かれた。報告書は「叛徒顧順章の叛変の経過と教訓」と題するもので、顧順章の人物評も含まれているが、きわめ

て政治色の濃い文書であった。この文書はずっと後に、《党的文献》（一九九一年第三期）に公刊された。それまではおそらく極秘の文書であった。報告者の杜寧は仮名で、本名は楊之華、瞿秋白夫人である。彼女はこれを一九三八年十一月末にモスクワ郊外にあったクラチク（漢字表記はクラ奇克）療養院で書いた。

《党的文献》編集者の注記によれば、楊之華は三五年にソ連に行つてコミンテルン代表大会（コミンテルン第七回代表大会、この大会でファシズムからソ連を擁護する国際反ファシズム戦線—人民戦線が決議された）に参加した。しかし、ソ連で精神的な支障を来たし、強制的に療養所に入れられたのかも知れない^⑤。

人名辞典によれば、コミンテルン代表大会後もモスクワに留まり、国際紅色救済会常務委員兼駐国際紅色救済会中国代表に就任するが、コミンテルン執行委員で中共駐コミンテルン代表として羽振りを効かしていた王明に迫害されて職を失い、組織からも見放された。この時、楊之華は肺病を患い、生活は極度に困窮した。三八年、任弼時が王明に代わつてコミンテルン代表になると、地位を回復し、党校に送られて半休養、半作業の生活を送った。この後、四一年に杜寧と名を変え、新疆を経て延安に潜入しようと企てたが、ウルムチで延安への交通が途絶されたため、八路军新疆弁事処に留まった。ところが新疆の実力者、盛世才が独ソ戦でソ連が不利な状況にあるのを見て、親ソ親共の立場を変え、国民党に接近した。新疆にいた中共黨員は盛世才に捕らえられ、監獄の囚人となった。楊之華が獄中から晴れて自由の身となったのは、夫の瞿秋白が名誉回復した後の四六年六月のことであった。楊之華は延安に着くと、過去のいっさいの処分は撤回され、中共中央婦委委員となって土地改革運動に参加した^⑥。

楊之華がなぜこのような文章を書いたのか、理由は分からない。顧順

章をこのように論評することで身の安全を図ったのかも知れない。コミンテルンから顧順章に関する報告書を書くよう求められたとも考えられる。先の評伝では杜寧と名前を変えたのは四一年のことだという。しかし、三八年に書いた報告書にはすでに杜寧と署名していた。この時間的な齟齬はどう説明したらよいか分からないが、報告書が書かれた背景には党内に夫、瞿秋白の問題も含めた複雑な事情があった。ちなみに瞿秋白は三五年に国民党当局に逮捕され、転向声明——《多余的話》を書いたが銃殺された。以後、楊之華は叛徒の妻となった。^(補注) 杜寧が書いた報告書は短いものであるが、さきに述べたように顧順章に関する党の公式の文章となった。楊之華は党の要求に応えて貢献したのである。後の党史作者はこれを下敷きにしてさまざまな顧順章の実像を描いた。

では、杜寧（楊之華）は顧順章という人物をどのように批評したのだろうか。短い文章なので引用してみる。^⑦

顧順章は、上海当地の人で、かつて南洋煙草公司以七年間、仕事をしたことがあった。最後の数年は工場の職工頭であった。一九二四年のストライキの最中に共産党に入った。入党後、南洋労働者支部の書記となり、数回にわたって南洋労働者のストライキ（五卅事件—筆者、以下同じ）を指導した。後に上海区委で仕事をした。一九二六年の末から、上海労働者の訓練武装の仕事に就き、ただちに上海各回の暴動を準備した。暴動中、およびその後も上海武装労働者糾察隊の隊長であった。四月事変（四一二政変）のあと、すぐ中央特科の仕事を担当し、ずっと一九三一年四月に逮捕されるまでこの任にあった。

顧順章の特徴は、一、背が低く、精悍で、はかりごとが多く、はげ頭、勇敢で、手品が得意であった。二、あまりものを言わず、同志には自己の経歴や社会関係（党員になると党から生活費を支給されるが党の指示に従っ

た。これを党生活といった。党員は身分を隠して一般社会で仕事を持った。これを社会関係といった）を話さなかった。三、平素、文書を読まず、会議では発言しなかった。四、生活はふしだらであった。

一九三一年の三、四月の間に、党中央は武漢に派遣した。目的は白区（国民党支配区）と赤区（共産党支配区）の交通路線（連絡網）を作るためであった。路線がまだ完全に作れないときに逮捕された。まず両湖の共党機関と軍隊の関係を告白し、同時に中央の五ヶ所の重要場所、すなわち向忠發、周恩来、瞿秋白の居所、中央秘書処、特科機関場所を供述した。彼の供述によって、両湖の白軍（政府軍に潜伏）中の重要同志と責任同志が逮捕された。幸いに中央はすぐに知らせを受けたので、上海の重要機関は前もって移転し、警察員らはただ慌てふためだけであった。しかし、顧順章は南京を離れると、国民党のために積極的に共党を破壊する仕事に就き、剿共特務隊の隊長となった。

このあとのくだりは顧順章の特務工作の手法について書かれたものであった。しかし、杜寧は以下の顧順章の情報は身近にいて知り得たとは思われない。^⑧

一、顧順章は（逮捕されたあと）、家族関係を利用して党（の移転先）と同志（の転居先）を探したが、しかし当時の中央の組織は厳しかったので成果はなく、逆に妻の家から自らが蒋介石宛に書いた未投函の手紙を押収された。内容はおよそこうだった。「もし蒋介石が私を信じるなら、共産党、第三党、取消派などの各種の組織関係—中央から支部まで全部、蒋介石に与えることができる……」。この手紙から、顧順章の叛党動機は逮捕された後であったのではなく、逮捕される前にあったことが分かる。しかし、この手紙はまだ投函されていなかったのは、動揺の期間

があったことを推察される。

二、顧順章がいつも同志たちの社会関係を利用するのは、同志らの家庭の関係、親戚友人らの関係、あるいは親戚友人の親戚友人関係を知っていたからである。顧順章がいつも走狗を手配りしているのは、われわれ同志が社会関係を作るか、あるいは監視し、あるいは反動分子を利用して関係を求めるためである。顧順章はこのような方法でわれわれ夫婦（楊之華と瞿秋白）を圧迫した。ただ、われわれはそのつど知らせを得て、社会関係と断絶していたので、顧順章は機に乗ずることができなかった。顧順章は向忠発の妻が同志でないのを知っていた。また彼女は向忠発が共産党と関係があつて、警備できない人物であることを理解していなかった。顧順章はこの弱点を利用し、：彼がまだ捕まる前に女中を紹介して向忠発の妻に与えて生活させていた。ただ、顧が密告した後、向忠発は解雇して家を変えた。しかし、家を変えた後、向の妻は過去の裁縫店ともどおりはずつと関係を持った。これによつて、顧順章は解雇された女中を利用して裁縫店を訪ねさせ、向がどこに引越したかを知った。その上、顧順章はこの女中を直接、向の家に走らせた。この時、向忠発は口実をつけて裏口から逃げ出し、妻に綁匪が来たと言った。その当時、党中央は手立てを考へて向忠発の妻と陳林同志（彼女は向らといつしよに住んでいた）を引越させた。ただ、敵はずでにこの関係を追跡していたので、結果、向忠発は逮捕された。

三、逮捕されたすべての叛党分子を利用して、街頭にちりばめ、とくに交通要衝の十字路、電車の駅、マーケットに配置し、重要人物を見つけたらすぐに手を下し、重要でない人物であれば尾行した。一九三三年に中央軍委が破壊されたことで陳賡が逮捕された。叛徒たちにマーケットで陳賡の妻が見つけられ、尾行された結果であつた。しかし、陳賡の妻が逮捕されたのは、顧順章が陳賡の妻の実家の関係を知っていたから

で、妻が実家に行ったので逮捕されたのである。

四、顧順章は賃貸しの家屋を布置し、疑わしい借家人がいればすぐ手を下した。われわれ同志の行動、服装などを知っていたからである。

五、顧順章は走狗を旅館、汽船の茶房に手配して、客を偵察した。

六、密偵を党の機関、とくに江蘇方面に行かせた。羅敦（登）賢同志が逮捕されたのは、全総の秘書に密告されたためである。

杜寧の報告は顧順章事件の真相を解明するために書かれたものではなかった。顧順章が所属した情報機関の特科についてはまったく記述しなかった、もちろん組織が遂行する作戦を取りあげることはなかった。しかし、顧順章の情報工作はすべて組織の指令にもとづいていたのである。杜寧は報告書の内容がほとんど顧順章の個人的な工作手法の描写に集中したことで明らかのように、事件当時、特科と顧順章にどのような関係であつたのか、組織の内部事情をまったく知らなくて、あるいは知らされずに報告書を書いた。だから当然の如く事件の起因をすべて顧順章個人の問題に収斂してしまつたのである。

楊之華は五卅事件のとき、顧順章と身近で活動したという。顧順章の人となりはこの時から熟知していた。だが、杜寧の報告書の大部分は知るはずもなかつた時期の顧順章の事情を詳述した。楊之華の前記の行跡から見ても、誰かからの情報によつて書かれたものに違いない。とすると、楊之華はどういう訳で、誰から頼まれてこの「報告書」を書いたのかはやはり顧順章事件を考えるうえで軽視できない問題であろう。

重要なことは、この楊之華の「報告書」が顧順章事件の性格を規定したことであつた。顧順章の叛変事件は個人的な問題が要因であつたという党の公式見解が作られた。これは事実を積み重ねた結果の結論ではなく、党の路線にもとづく見解であつた。顧順章にかかわる見解は以後、

党の公式見解の枠組の中で議論されることになった。

かくて、このような顧順章像が語られることになった。

上海のレンペンプロレタリアート出身の陰謀に長けた労働者が機会をつかんで共産党に紛れ込み、少しばかりの手柄を鼻にかけて、神聖な党の活動を個人の欲望に変え、放蕩生活の挙句に敵に党を売った。党組織の奥底まで知り尽くしていたこの叛徒は、党中央のあらゆる機密をしゃべり、党の存続を危機に至らせた。敵中であって共産党の撲滅に従事するが、その敵からも反逆者と見なされて殺された。恥知らずの叛徒のふさわしい末路であった。

このような顧順章像が喧伝されて、顧順章事件は現代史から掻き消された。

顧順章事件ははたして党史が語るような卑小な事柄であったのだろうか、後につづいた総書記向忠発の逮捕事件、ニューラン事件、伍豪啓事事件は顧順章の離党行動と関連がなかったであろうか。本稿の問題意識は前稿（本誌第五九八号）の冒頭で述べたとおりであるが、ここで、もう少し顧順章が「叛変」した過程で楊之華が故意に取り上げなかった足跡を「利用できる」証言（材料）によって追跡してみよう。まず「利用できる」証言について簡単に述べておく。

顧順章の「叛変」事件は、八十年代の初めに中共中央高級党校新聞教研室主任、光明日報党組書記兼総編輯など党の言論機関を牛耳っていた穆欣が周恩来の情報工作を顕彰した論文に取り上げてから、つぎつぎと数編の文章が発表された。八十年代になって中共の情報機関の実態の公開に対してもわずかながら自由な空気が生まれつつあった。二〇〇二年一月に刊行された穆欣の『隠蔽戦線統帥周恩来』は中共特科を事件と人物を軸に体系的に描いた著書の先駆となり、権威の著書となった。しかし、ここで描かれた顧順章の行跡は中共側の作為的な目的で書かれてお

り、決して真実を明らかにするものではなかった^⑩。

一方、国民党の顧順章事件に対する態度は終始受身であった。国民党の情報機関は党中央組織部に設置された調査科であり、責任者は蒋介石の股肱の臣、陳立夫と親戚（陳果夫、陳立夫と表弟）の徐恩曾であった。顧順章の国民党への投降は、組織部調査科が対中共政策を厳罰主義から投降を勧告する「自新」政策に変更してからの最初の成果であり、顧順章の「自新」を契機に中共に対する情報工作は一挙に優位な状況を作った。

顧順章が漢口で偶然に逮捕されたのか、顧順章自身が投降したのかは、「顧順章事件」の真相を占う重大な要素となるが、調査科、中統に長く勤務して組織の内情をよく知る調査科股長の張文（張国棟）は、「顧順章案は徐恩曾の直接の主持のもとに産生されたものである」と述べた。張文の回想文（『細説中統局』）は国民党、中共双方からもよく利用されて、幾種かの雑誌に掲載された。張文は徐恩曾が確かに顧順章事件に一部始終関与していたことを断言した。徐恩曾は顧順章事件の主宰者としての捜査記録を残した。Frederic Wakeman, Jr フレデリック・ウエイクマンが『Policing Shang Hai』『上海警察』で引用する中央組織部特務組調査科編「顧順章家族事件檔案」、「消滅共匪」紅隊暗赤経験簡述」（国民党中央調査統計局檔案所収）などの公式文書がそれである。徐恩曾の部下で武漢に派遣され、拘束したのちに訊問した蔡孟堅にも顧順章に関して文章を書いた。さきあげた事件と党の情報本部の現場の責任者の立場で回想した張文（張国棟）の文章は、国民党の特務機関の内部を知る記録である^⑪。

穆欣、張文、蔡孟堅らの論文が公表されると、堰を切ったように顧順章事件に関連する文章が出現した。補足するものもあれば、疑問を呈する文章もあった。確かにいえることは、党の無謬性を誇張する記述から事実を探求しようとする論調が表れ、新事実や新観点が見られるように

なったことである。

穆欣は主著『隱蔽戦線総帥周恩来』でかなりの紙幅を顧順章の記述に割り、「叛徒」の経歴を徹底的に暴こうとした。顧順章が党を裏切るに至ったのはその出身階級の本質の由って来るところにあったと強調した。楊之華からはじまる党の公式見解を敷衍するものである¹⁶⁾。

顧順章は、一八九五年に江蘇省宝山県の白楊（いまの上海市宝山）に生まれた。宝山は黄浦江の河口、長江に合流する呉淞口のさらに下流にあり、たしかに裕福な階級の住む土地ではなかった。穆欣は、この地の流氓無産階級の家に育ったことが、一生の行動を規定したのだという。

小さいころからぶらぶら遊んでばかりいてろくに仕事をせず、青帮の親分を先生と敬った。上海に出てから、最初は楊樹浦にあった英商南洋兄弟煙草会社の製造工場で機械組み立て工になった。人に取り入るのが上手く、いつも仲間の工員を威圧したので、資本家にほめられ、職場の「拿摩温（職工長）」になった。彼をよく知っている人によれば、その風貌は背が低くて肥っており、丸顔で浅黒く、鼻は低く、目つきは凶悪で、殺気がみなぎっていた。性格は陰険で狡猾であった。労働組合に入ると、組合活動の積極分子となり、また暗黒社会の顔役となった。小さい時から旅芸人をして世間を渡り歩いていたので、ルンペンプロレタリアートの欠点を多く身につけ、悪い習慣に染まっていた。教育を受けたことはなく、武芸の鍛錬にはげみ、喧嘩はやく、二丁拳銃を使いこなし、魔術^{てじな}が得意であった。魔術大師化広奇の芸名で上海の大世界遊藝場や堂会（家に祝いごとがあると、役者や芸人を呼んで余興を演じさせた）にたびたび呼ばれることがあった。また斜橋路の一角に「奇星魔術社」の看板を掲げ、魔術の小道具を売る専門店を開き、ガラス張りのショーケースに奇妙な形をした玩具を陳列していた。彼が得意とした魔術の演目の中に「大鋸美人」（美人の女性を大きなのこぎりで切り裂くという手品であろう。「美

人」役は顧順章の妻、張杏華が扮した）や「鬍髯説話」（どくろがしゃべる）があり、観客にたいへん人気があった。彼が出演するとき、特科の紅隊（赤色テロ隊、打狗隊ともいった）の隊員、譚忠余、張阿蓮、張文虎、張文龍らが脇役として舞台に出た。顧順章と関係があったものに、なお馬力斯小菜場（いまの重慶路小菜場）近くの傭工紹介所（俗に「薦頭店」といった）があり、中はいつも仕事を待つ人でいっぱいであった。老板の趙景福は黨員ではなく、外部の人間だった。党はこの紹介所を通じて高官の公舎に侵入して普通では得がたい「珍秘」を手に入れた。

一九二四年、顧順章は革命に「やま」を賭けて共産党に紛れ込んだ、と穆欣は述べる。顧順章は入党してから、二五年の五卅運動では労働者のストライキに果敢な行動をとった。党組織は才能を見込んで労組内に秘密の糾察隊を組織し、敵と通じた叛徒や敵に養育された工賊を鎮圧させた。労働者を武装する手腕は誰しもが認めるところとなり、五卅以後、中央機関に移って活動することになった。また、上海の总工会（労働組合総連合会）の工作に移って手腕を発揮し、「脱産の工会工作者」の異名をとったともいう。

顧順章が共産党に入ったと年については異説があるが、後述するように、二六年にソ連に行って訓練を受けたとなれば、五卅事件の「どさくさに紛れ込んで」入党したとするのが妥当だろう。黨員でない者をわざわざ特務工作の訓練に留学させるようなことはないからだ。もともとこの時期は、国共合作の成立のもとに、党勢の拡大を図って「黨員大募集」を行っていた頃でもあった¹⁷⁾。

ところが、Han Suyin、ハン・スーインは『長兄—周恩來の生涯』の中で、先の顧順章のイメージと異なる見解を述べた。

「一九二七年、ハンサムでスマートな青年、顧順章が共産党に入った。（四月十二日の）上海大虐殺のとき、勇敢な行動を採り、政治局委員になっ

た。賀龍、朱徳などと同じように顧順章も上海幫会の洪門会員であった。顧順章は多才多芸で、歌も唄えば魔術もできた。彼の得技は血を流さず人を殺すことで、殺したあと何の痕跡も残さなかった。彼は党の変革にひどく失望し、不満であった。「これは（王明ら）二十八人（ボルシェビキ派）の傑作であり、ついに彼に叛党という不幸な事件を起こさせることになった」^⑧。

顧順章の「叛変」事件のあと、党中央が事件を総括した中で、李立三路線と四中全会が顧順章を動揺させたのだといった周恩来の発言に、ハン・スーインは取材中、あれはどういう意味かと訊ねると、周恩来はじつはミフに操られた王明ら二十八人が当初から顧順章が党を裏切るように仕向けた演出の傑作であって、顧順章はまんまと演出どおりに「叛党」という不幸な事件^⑨を演じたのだと説明した。

ハン・スーインは先走って顧順章が叛変する動機まで語ったが、ハンサムでスマートな青年が多才な技能を發揮して党の保安部門に貢献したという評価は杜寧の指摘とはずいぶん異なり、穆欣の風貌の描写が意図的な記述であったことが分かるし、また逆に顧順章叛変事件と党路線との関連性を浮き彫りにすることになった。ハン・スーインが周恩来から聞き出した顧順章事件の背景は真相解明の重要な証言なので、このあとでじっくり考えることにするが、ここで、顧順章の特務活動の資本となったソ連での情報訓練のことについて記しておこう。

二六年の九月、顧順章は党中央総書記の陳独秀にソ連留学を命じられた。ソ連で特務工作の訓練を受けるためであった。顧順章のほか、陳賡、陸留が同行した。ソ連留学については、杜寧は故意に報告書に書かなかつたが、この時、党中央総書記の陳独秀が如何に顧順章を高く評価していたかを物語るものであった。

ともに訓練に参加した陳賡によれば、三人はまずソ連船でモスクワに

行って到着を復唱し、そのあと紹介状を持って極東地区の赤軍部隊に入り、政治保衛工作と武装暴動の経験^{じっせん}を学習した。ハバロフスクでは偵察と尋問工作を学び、ウラジオストクでは爆破、射撃などの技術を習得したという^⑩。

射撃が得意だった陳賡は、特科の情報科長時代、つねに拳銃を持ち歩いた。「50メートル先の塀の上にたくさんの電球が並んでいて、その電球に灯りが点くと、拳銃ですばやく撃つのだ」。ウラジオストクでの陳賡の成績はいつも優秀であったらしい。

後年、顧順章から情報工作の訓練を受けた中統特務員の孟真もソ連での訓練の様子を聞いた。

「ソ連共産党はツァーロシヤの秘密警察に対応するため、情報工作の制度、技術、記録などのあらゆる方法を研究した。政権を取ってからも絶えず工夫を重ね、ゲーペーウーの伝統的な法宝^{ほうぼう}となった。顧順章がソ連に行ったのは他でもなくこの法宝を学ぶためであった。顧順章がソ連で受けた訓練の期間は長くなかったが、持ち前のすぐれた機敏さで、全身に技術を取得して帰って来た。文^{ぶん}の方面では変装、魔術の上演、機械の操作や修理、心理学などすべてに精通していた。また武^ぶの方面では二丁拳銃、爆破、室内で拳銃を発砲して外部には聞こえない技術、徒手で人を殺して痕跡を残さない技術などをもっていた。だから大^{おほし}師^しだと褒め称えても誰も異論を挟むものはいなかった」^⑪。

穆欣や康学軍らの党史作家が流氓無産階級出身の体現としてさかんに吹聴した顧順章の多才多芸の技能は、じつはウラジオストクで習得したソ連特務機関の技術であった。ハン・スーインも孟真の話を採用して顧順章を語っていた。顧順章らはソ連で半年足らずの訓練を受けて、二七年二月に帰国した。総書記陳独秀から命じられたソ連留学の目的は三度目の上海暴動を準備するためであった。

しかし、顧順章の特務工作の手腕が発揮されるのは、周恩来が創った中共中央の保衛機関においてであった。

「四・一二」政変で中国共産党は大打撃を受けた。中共は漢口で中国共産党第五回全国代表大会（以下「五大」というように略す）を開催し、コミンテルンからロイ、ボロディン、国民党から譚延闓、徐謙、孫科が出席して、「中共の緊急時期における任務」を確認し、陳独秀を総書記に選んだが、八月にコミンテルンの指令で中共中央は「八七会議」を召集して、「大革命」失敗を総括し、陳独秀の「右傾投降主義」の誤りを糾弾した。さらに中共中央は国民党に報復する「秋収蜂起」を計画し、汪精衛との決別後、退路を開く「南昌蜂起」を起こした。

劣勢なこの間の共産党の中で、中央政治局委員、中央軍事委員会書記兼組織部部长であった周恩来は一人、「大革命」で弛緩した党員の規律を引き締め、叛徒の肅清を開始した。武漢では中央軍事部、後の中央軍事委員会（以下、中央軍委と略称する）がこの保衛工作になった。

顧順章は中央に随って武漢に移動し、中央軍委に特設された特務科——軍委特科の科長になった。この年の七月、武漢分裂後、中共党組織は地下にもぐり、党中央は上海に移転、機関をフランス租界内に置いた。十一月四日、中央政治局常委会は向忠発（あるいは李立三ともいう）、周恩来、顧順章によって特別委員会を設立することを決定した。中央軍委書記兼組織部部长の周恩来は、中央軍委特務工作科を中央特科に組織を拡大して中央に直属させることにした。中央特科は周恩来が統率したが、実質的には紅隊隊長の顧順章が責任者であった。この中共の特務機関は「特科」と呼ばれた。²³⁾

ただ、顧順章が実質的に主持した特科の成立経緯については、実態は必ずしも明白ではない。中共中央が上海に移転したあとに中央特科に加わった洪揚生は、「周恩来は南昌起義を指導したあと、上海に戻って中央

各機構の整理に着手し、また彼が責任を負う中央特別任務委員会（特委と略称した）を設立した。特委の下に特科を設け、特委は決策機関であり、特科は具体的な任務を執行する機関であった。周恩来は特委工作を主持し、また自ら特科工作を指導、指揮した。特科には二つの科、一つの行動隊（紅隊といった）が作られ、すぐあとに無線電台が設立された。顧順章が特科総責任者となり、また紅隊を率いた。私は一科の工作に責任を負い、総務を管理した。陳賡は二科の責任を負い、情報を管理した。無線電台が設立計画されたとき、一科とちよつとした事務の連係^{つながら}があったので、李強が無線電台の最初の責任者となった」と回想している。²⁴⁾

いったい、情報機関とか特務工作は政治運動のもつとも秘密にされた部分であるから、その組織の全貌が白日のもとに晒されることはない。じつさい、特科の工作員であった陳養山は、自分がどこに所属して、どんな目的で行動しているのかまったく知らなかった。ただ命令されたことだけを実行していた。ずっと後に任務を離れてから、はじめてすべてを知ったと告白している。特務工作の命令と実行はすべて一本の線（単線連絡）で繋がっていつどの部署がどんな工作をしたのかは誰も分からなかった。

武漢で中央特科の前身ができ、上海で正式に組織と陣容ができるまでの過程で、創設者の周恩来は一貫して顧順章を引き立てた。だが、一見して特務工作の専門家の顧順章を重視したように見えるが、周恩来は簡単に特科の責任者を取り替えた。それは特科責任者の過失によるものではなく、すべて解任した周恩来の個人的な理由によるものだった。政治情勢の変化により現実の情報工作が自己の政治行動に弊害を生じたのである。周恩来の政治的スタンスはよく言われるように、「すばやく立場を鞍替えすることで生き延びた」²⁵⁾。顧順章が如何に献身的に党の情報活動を実行したかは後述するが、三二年四月の事件が起こるまで顧順章は党

中央に対して叛意を懐いたことはなかった。

中共中央の情報機関の中でずっと存続した組織があった。前出の中央軍事部（後に中央軍委と通称した）と呼ばれる組織である。中央軍委書記の周恩来はこの組織をもっとも信頼した。その中央軍委と関係が深く、顧順章事件でも重要な役割を果たした李強は、中央軍委の成立と組織についてこのように述べている。

「四・一二政変のあと、武漢の中央軍委に出頭した。中央軍委の当時の書紀は周恩来で、軍委のもとに二つの長があった。一つは参謀処で、参謀長は聶榮臻であった。秘書長の王一飛は犠牲になった。他に二つの科があり、一つは組織科、組織科長は歐陽欽であった。後に特務科（中央軍委特科とも呼ばれた―原注）ができ、責任者は顧順章で、五大で中央委員に当選した。私は当時、特務科にいた。特務科の下に四つの股（係）があった。一つは中央の指導者や中央機関の保衛を担当する保衛股、……他の一つは情報股といい、情報を集めた。……情報股長は董胖子^{あんせん}で、たぶん董醒吾か董省五といった。他の一つは特務股で、叛徒を鎮圧する任務を担当し、また中央から与えられた特殊任務を兼任した。特務股は「紅隊」の工作を行う、みんな「紅隊」は「赤色テロ隊」だといった。……私が特務股の股長になったとき、部下はわずか三人だけであった。一人は老白臉といい、一人は小白臉といい、一人は王竹樵といった。他に臨時に外部からきた人がいた。……軍委の弁公処は漢口の余積里にあった。周恩来同志はここで仕事をした。秘書処はここにあり、組織科、特務科もここにあった。ただ、参謀処参謀長聶榮臻は武昌中和里で仕事をした」。

李強は中央特科にはじめて無線通信部門を作った人で、中央と各根据地、都市間の通信を掌握していた。のちに、顧順章が逮捕され、自供した情報をいち早く上海でキャッチした。中共中央が上海に移ってからの

ことである。李強の回想は武漢時代の軍委の特務科の内情を詳細に語ったが、中共中央が上海に移転したあと、軍委特科はどのような任務を担ったのか、中央特科とどのような関係にあったのかははっきり分からない。中央軍委が組織上、ずっと存続したのは、参謀長の聶榮臻が三〇年五月に中央軍委から特科に転任し、九月にまた軍委に帰任したという自身の回想からも明らかである。周恩来は、後述するように特科から顧順章を調離するときに聶榮臻を使ったのであった。

話がすこし飛躍するが、李強の回想を読んでいてはたと思い当たるふしがあった。顧順章事件で重要な鍵となる顧順章の逮捕に軍委がどのように関わったのかというかねてからの疑念にヒントを得たのである。詳細は後述するが、下記の周恩来と聶榮臻の関係を重ね合わせて考えると、顧順章粛清の実行部隊はたしかに聶榮臻をリーダーとする中央軍委のグループであったことが確認できる。周恩来と聶榮臻の連係というのは、以下のような経緯があったのである。

一九三〇年八月十九日²⁷⁾、周恩来がモスクワから帰って来てまもなく、聶榮臻が中央軍委に帰任し、ふたたび周恩来の助手となった。翌三二年一月、王明政権に疎外されると、周恩来は聶榮臻、陳郁、陳賡ら七人を糾合して中央軍委を組織したという。新しく編制された軍委は周恩来が書紀となり、聶榮臻が参謀長となった。

周恩来は李立三の都市暴動を批判するために、暴動発動の専門家顧順章を特科の任務からはずし、李立三の計画を牽制した。李立三がコミンテルンから批判されて失脚すると、王明の右派に対する肅清に加担して、羅章龍、何孟雄らを国民党に売り、顧順章、向忠発の追放、肅清にこの新軍委のメンバーを動員したのであった。四中全会後、中央特科の実権は王明派の康生の手に移り、周恩来が秘かに指導する中央軍委との間に二重構造ができた。聶榮臻は、「(軍委)特科で実質的な工作をしたもの

は、他に陳賡と李強がいた」と述べ、「われわれは李克農、錢壯飛、胡底という優秀な同志を敵の要害部門に潜入させた」と周恩来と軍委の深謀を自慢した²⁸。

ii 李立三路線と顧順章

ここで、六大の時期まで遡って、李立三路線での顧順章の具体的な行動を追って見よう。周恩来はなぜ中央特科から顧順章を「調離」（辞典によれば、調離は職場を移る、もとの職場から移動する、関係機関に転出する、とある。ここでは政治的な意味から、排除する、追放すること、情報機関から離れることは生死に係わった）しようとしたのであろうか。周恩来が顧順章の「叛変」事件は李立三の革命路線と王明の四中全会に影響を受けたと指摘した真意は何であつたのであろうか。このことは逆に、周恩来の日和見的な政治姿勢の転変に否応なく振り回された顧順章の動向を跡づけることになる。六大がモスクワで開かれたことに象徴するように、中国の革命運動はいぜんコミンテルンの指示の下に置かれた。コミンテルンに忠実であつた陳独秀の「右傾日和見主義」路線と瞿秋白の「極左冒險主義」路線の是非が討論され、陳独秀路線の誤りは批判されたが、瞿秋白の「極左冒險主義」に対する議論は以後も党内に存続した²⁹。

現在の革命情勢が高揚期なのか、低調期なのかはスターリンの説得で、高揚と高揚の谷間にあるということになり、現在の党の任務は進攻ではなく、大衆を獲得し、新たな革命の高揚の到来に備えることになった。

六大一中全会（六大第一回中央全体会議）は瞿秋白、張国燾、李立三、向忠發、周恩来、蔡和森、項英らを政治局委員に選んだ。中央政治局総書記になった向忠發は労働者の出身であつたが、スターリンの一声で党中央の頂点に立った。しかし、労働者党員に威信を欠き、労働運動の経験が古い李立三に党の主役の座を許した。モスクワからいち早く上海に

帰って来た李立三、瞿秋白は向忠發、蔡和森を率先して六大の決議を実行した。コミンテルン第六回代表大会に出席してすこし遅れて帰国した周恩来も新中央の工作に加わつた。ただ、権力の獲得に少しばかり遅れを取つたことが李立三との関係に微妙な影を落とすことになった。

のちに李立三路線としてコミンテルンと党中央から批判を受けることになる都市暴動の革命路線ははじめから発生したのではなく、「特定の歴史的條件」のもとで形成されたものであつた、という指摘がある。六大から二年近い期間の李立三の中央での工作は、誠実に六大の決議を実行するものだった。ところが一九三〇年の半ばになって李立三が待望していた革命の高潮期——「特定の歴史的條件」が出現した³⁰。

一九三〇年六月の段階では、工農紅軍は十万以上に膨れ上がり、国内で三〇〇回を上回るゲリラ戦争が展開され、革命根拠地は大小十数か所の地点に発展した。またこの年の五月に、蒋介石と閻錫山、馮玉祥との間に、空前の規模の内戦——中原戦争が始まつた。双方の作戦に動員された兵力は一〇〇万人以上に上り、戦場の後方は自ずと空白の状態となつた。こうして国民党、軍閥の「反動統治」の危機が発生したのである。

革命の高潮がすでに到来したと確信した李立三は、六月の政治局会議で、「革命の高揚はすでに到来し、いまや政権を奪取する任務はすでにわれわれの眼前にある。……革命情勢の到来とは暴動情勢の到来である。直接革命とはなにか？ すなわち暴動の情勢である。この情勢にあつては、まずどこかの一省で革命が高揚すると、ただちに全国に波及する可能性がある。……このような革命の高揚が先駆的に爆発する可能性もつとも高いのは上海か武漢である。中国革命の高揚の到来はひいては世界革命の高揚を引き起こすであろう」と暴動^{ホルテジ}発動の檄を飛ばした³¹。

七月になると、李立三の暴動発動の熱情は頂点に達し、七月十三日の臨時政治局会議でいよいよ具体的な計画が提出された。

「南京の兵士暴動は全国の革命高揚を推し進める起点であり、南京暴動の組織は上海ゼネストの組織と同時に並行して進めなければならぬ。南京暴動の成功後、つづけて武漢暴動を爆発させねばならず、そこで武漢における先駆的勝利を勝ち取り、中央ソビエト政府を武漢に樹立しなければならぬ。全国各省は各重要都市において急ぎゼネストを組織することに努めるべきであり、各省の活動はすべてゼネストを前提とせねばならない」³²。

八月、李立三は全国各省の重要都市のゼネストを指揮統括する中央総行動委員会（中央総行委）の創設と南方局と北方局の設立を提起した。

コミンテルンから李立三の暴動路線を批判する通達が届けられたのは直接周恩来の口からであった。周恩来は、早くから李立三の革命の高揚が到来しつつあるという認識に同調し、二月十七日の政治局会議で決定した「一省あるいは数省の暴動」に大いに期待した。周恩来はこの会議で「当面の党の任務は、主体的な力量で直接的な革命情勢をつくりあげ、政権を奪取することだ」と述べ、「政治ストを組織し、地方暴動を組織し、軍隊の反乱を組織し、紅軍を集中して都市を攻撃するという四つのスローガンは、いまやわれわれの中心戦術である」と言明していた。かくて、周恩来は政治局に暴動の準備を通達する「通告」（中央通告第七〇号）の起草を命じられた。

ところが、舌の根が乾かないうちに、周恩来は五日後の会議でこう発言するのだった。「闘争の展望をいうなら、革命は高揚に向かっている。だが闘争は一步一步展開され、一步一步革命の高揚へと進むものであり、まもなく革命の高揚だという過大な幻想を懐いてはならない」³³。

周恩来はここで何を言わんとしたのであるか。発言の真意はいつものように曖昧で、はっきりしない。のちに周恩来は、「いわゆる新たな高揚と直接的な革命情勢とは同じものではない。現在すでに新たな高揚が

生まれているが、なお直接的な革命情勢ではない」と弁明した。わずか一ヶ月の間の周恩来の発言の「ずれ」は、コミンテルン極東局の優柔不断な中国革命に対する情勢認識に左右されたものであったが、周恩来の心境は激しく揺れ動いた。このような動揺する気持ちを懐いたまま周恩来はモスクワに出発した。コミンテルンに召喚されたのだという。この年の三月の初めのことであった。

ところで、上海に帰って来てから、周恩来のもとで中央の保衛機関、特科を主持していた顧順章にとつて、都市暴動を積極的に推進する李立三路線はあたかも「水を得た魚」のように自由な環境を与えてくれるものだった。

だが、重要都市のゼネストを計画する李立三路線のもとで特科は組織上どのような任務を担ったのかは明確でなかった。周恩来は特科の策略として何も決定しなかったのかも知れない。李立三の言動がしだいに過激になってゆくと、周恩来は現在の革命路線の先行きに不安を懐き、意識的に上記の会議での発言のように李立三との距離をとり始めた。モスクワからの召喚は「渡りに船」であった。渦中の現場から姿を消し、事態の動向を見とどけて「勝ち馬」に乗るといふ身の処し方は周恩来がおのずと身につけていた保身術であった。周恩来の特科がほんらいの任務のほか、積極的に李立三の暴動計画を支援する行動はなかった。³⁴

李立三の党中央が文芸界の統一戦線の計画を進めるのは二九年十月のことである。中央宣伝部部長であった李立三は六大二中全会の決議にもとづいて中央文化工作会議（当時文委と呼んだ）組織し、小さな同人雑誌の編集者の潘漢年を中央宣伝部に抜擢して文委第一書記に就け、党の文化工作を推進した。潘漢年は文化界の著名な文化人、知識人に取り入り、やがて魯迅を中共の陣営に引き入れて中国左翼作家連盟を成立する。潘漢年はまた著名な知識人を共産党の陣営に引き入れ、彼らの手から国民

党高級階層の政治家、軍人から機密情報を聞き出した。かつての袁世凱の政客で、かつ著名な学者の楊度を共產党に取り込み、上海裏社会の顔役、杜月笙を通じて政界の裏情報を入手したことは潘漢年の特筆すべき功績であった。

潘漢年は顧順章事件のあと、周恩来から特科に招かれて、陳雲、康生と新しい特科を組織するが、党中央が中央ソビエト区に移ると、一人で特科の責任を負った。長く李立三のもとで活躍した潘漢年を「白色テロ」の渦中に特科の責任者に登用したのは、新権力者の王明への屈従の表明でしかなかった。

「労働者出身で普段から文章を読まず、議論が不得手だった」顧順章は、潘漢年のような文化工作はできなかった。周恩来が組織した特科は前述の李強の回想にも分かるように、保衛、武闘などの実戦的な工作しかできなかった。だが、党上層部の権力闘争には無頓着だった顧順章は、周恩来の意図を推察せずに自由に特科の使命を謳歌するのであった。

裏切り者の人生は初めから裏切りの行動を取っていたと、顧順章の悪行をさかんに暴き立てた党史作家の記述は、李立三路線での顧順章の特科活動のことであつたらう。これらの行動はとうぜん肯定すべきものではなかった。

中央特科での顧順章の職務は組織の花形である行動隊を統率することであつた。行動隊は敵の特務や叛徒を容赦なく鎮圧するのが任務だった。だから「打狗隊」³⁵、「紅色恐怖隊」³⁶と呼ばれて恐れられた。以下の記述は代表的な党史作家の穆欣が語る顧順章の「打狗隊」の活動の一部である。すこし長くなるが、興味ある見解を述べているので、以下に紹介しておこう。

一九二九年になつても大革命の影響はまだ存続し、労働者と革命力量は強大であつたので、反動勢力は軽挙妄動しようとはせず、党の隠蔽闘

争の発展は順調で、そのとき、顧順章はいつでも大量の銃器を手配でき、機関銃も手配できた。大つぴらに外国商社で銃を買ひ、さらに外国商社に銃器を運搬させることができた。穀物食糧店から食糧を運ぶこともでき、車に武器を置いて、随意にある場所で発砲することができた。恐怖行動が特定の条件の下で勝利することができた。なぜなら敵の確実な迫害で、叛徒は上海に止まらなかったからである。顧順章はもとも青帮の流氓出身であり、機会をつかんで革命隊伍に紛れ込んできたので、彼の流氓本性はしだいに暴露されることになった。彼が紅隊を率いた当初、それまでの青帮の流氓組織の中の「小兄弟」を「打狗隊」に引き入れ、かなり程度に組織は純粹でなく、思想は純粹でなくなつて、闘争に不利な状況になつた。顧順章はさらに「打狗隊」を用いて、青帮の流氓組織の中の哥兒們のために黒社会で「出入り」を起こした。あるとき、青帮流氓のボス、顧竹軒（蘇北の人、青帮の組織中の「通」という字のランクの流氓で、上海の新天瞻舞台劇場の支配人）が別の劇場の支配人の常春恒と矛盾を起こし、顧順章は紅隊隊員を率いて顧竹軒を助けて常春恒を打ち負かした。このようなやり方は完全に党の原則と組織規律に違反しており、もしも制止しなければ、きつと党の工作に危害をもたらせたであらう。……一九二八年三月のこと、数人の紅隊の隊員が上海の鼎新旅館で、上海に来て武器を買つて地主の武装にした李仲丹を殺して騒動を起こし、その事件にかかわつた紅隊隊員の大部分が逮捕され、ある者は叛変し、ある者は病死して、紅隊の戦闘力をひどく弱体させた。このことで、周恩来は自ら手を下して三科と紅隊を整頓し、その中の何人かの流氓意識もち、（黨員として）不適合な者を調離し、党性（党に対する階級的自覚）が純粹で、作風（党の工作に対する態度、やり方）が正派の幹部を補充して、紅隊の面目を大いに改めた。

中央特科の権力は大きかったが、ただ、周恩来は終始、中央特科を中

共中央の指導の下に置き、工作と規律に対する要求はきわめて厳格であった。ある時期、何がしかの党員が白色テロの試練に耐えられずに自首して叛変した。党は危害の大きな個々の叛徒に対して鎮圧の手段を取って、徐々にこの歪んだ気風を制止した。ただ、下部党組織の幾人かの同志および特科の顧順章は、叛徒を鎮圧する際、いい加減にし、危害の大小に係わらず、みさかいなく打ち殺し、紅色恐怖を作り出して、大衆から遊離し、自己を孤立させ、はなはだ好ましくない政治的影響を生み出した。周恩来は一度に止まらず顧順章および下部組織を批判し、みさかいなく打ち殺す風習を制止した。

勝利の形勢が発展するにつれて、顧順章の誤った思想は日増しに深刻な情況で表れた。一時の勝利に頭がくらみ、得意になって我を忘れ、恐怖行為に自分自身が酔いしれた。彼は簡単に眼を血走らせて人を殺したので、殺人魔王の異名をとった。

このようなやり方は、明らかに党の長期の利益と互いに齟齬するところがあり、党の秘密工作の方針、政策とは真反対に食い違うものであった。その拡大に任せておくと、勢い必ず深刻な悪い結果をもたらし、社会の人びとの同情を失って、党は孤立に陥る破目になるに違いない。その上、叛徒白鑫を処刑して以後、敵は力量を増やし、策略を変え、客観情勢の急激な変化は、我々に組織の改変を迫らせた。周恩来は手を尽くして顧順章の恐怖行為の誤りをただし、党の隠蔽闘争を政治闘争の軌道に引き戻した。

あるとき、租界（警察）の包打聴たんでいの総機関が毎週「一品香」旅社（二品香は上海の有名な西洋料理店―筆者注）で二、三十人の包打聴のボスを集めて会議を開いた。顧順章は恐怖手段を使って、これらの輩を一同に爆弾で殺そうと計画し、数個のトランクに詰めた爆薬と時限爆弾を準備した。この爆薬は彼が特とくむじょうほう情関係を通じて日本の兵舎から手に入れたもので

あった。もし彼の計画どおりに事が進むと、このホテルの建物はきつと爆破されて、「一品香」旅社はきつと廃墟になり、周囲の住民もきつと大きな被害に遭うだろう。そのとき周恩来は干渉して、この恐怖行為を阻止した。⁵⁶

叛徒白鑫を処刑したというのは、二九年八月、中央軍委秘書の白鑫が国民党に寝返り、澎湃（当時、中央政治局委員、中央農委書記兼江蘇省委軍委書記）、楊殷（中央政治局候補委員、この時、中央軍事部部長で軍委書記の周恩来の工作に協力していた）、顏昌頤（当時、中央軍委委員兼江蘇省委軍委委員）、邢士貞（中央軍委、江蘇省委軍委の幹部）の四人を売り渡し、中共中央の指導たちが一挙に国民党当局に処刑されたという事件である。黄埔軍校以来の親信の部下であった白鑫が密告したのを知った周恩来は、ただちに特科の陳賡、顧順章に白鑫の処刑を命じた。白鑫の鎮圧は顧順章の功績が大きく、周恩来の致命的な政治失策を救った。白鑫叛変事件を見ても、顧順章の特務工作がすべて恐怖行為だったとは到底いえなかった。

しかし、穆欣は李立三の革命路線の中での顧順章の特科活動をすべて個人的なテロ行為と見なした。そのテロ行為は若年に上海の暗黒世界に足を踏み入れ、青幫というやくざ社会の中で染まった流氓氣質があのよプロウツキうな野蛮で残忍な行為をとらせたのだと強調した。だが、穆欣の見解は、楊之華が顧順章事件は流氓無産階級の本質にもとづく個人的な資質によつて発生したと説く階級起因説を補強するものでしかなかった。だから、顧順章の個人的な生活や信条までことさら歪曲して暴露するのだ⁵⁷た。

したがって、穆欣は顧順章の経歴を述べるさいに、時間に沿ったその都度の真実を分析せずに、共産党を裏切って敵に投降したという事実だけを前提として過去の言動に言及した。その意味で穆欣の前出の文章は、

事実の真相を明らかにするのが目的ではなかったもので、それだけに政治的な意図が鮮明に見える。ときに筆者が穆欣の文章を興味深いといったのは、穆欣が描いた顧順章の特科の工作は、彼自身の身勝手な「テロ行動」ではなく、李立三の「都市暴動」路線を陽動する積極的な行動であったのではないかと思えるからである。

三十年のこと、特三科すなわち行動科の科長であった顧順章は、上海カ徳路に「紅隊」のために特別短期訓練班を作った。最初、顧順章はここで訓練に参加した隊員に上海の街道里弄のすべての大小の道路、路線や住民の住宅の具体的な状況を熟知させ、次に国民党政府の憲兵、特務、警察機関と流氓幫会の状況を熟知させ、また変装、監視、破密（暗号解読）や射撃などの技術を教えた。これらの訓練が李立三の都市暴動に備える中共特科の周到な準備であったことは容易に理解できよう。

李立三はのちに自らの都市暴動の革命路線が「左傾冒險主義」として非難され、三一年から四六年までモスクワに召喚された。モスクワでの生活は学習というのが名目であったが、じつさいは軟禁に近かった。李立三の革命路線がとりわけ革命の前線にいる労働者幹部に不評を買ったのは現場の状況を無視して暴動の発動を性急に迫ったからであった。

三中全会のあと、李立三を猛烈に批判したのは、このあとすぐに党中央の主導権を握る王明らの国際派と、意外にも労働運動の老幹部、羅章龍、何孟雄らの「右派」であった。彼らは革命の現場で現実の革命情勢を顧みない「左傾冒險主義」の李立三に反撥したのである。顧順章が李立三の都市暴動路線に活躍の場を求め、積極的に暴動計画に参画したのであれば、穆欣がいう周恩来の顧順章批判は、延いては周恩来の李立三に対する非難にもなる。すると顧順章に対する批判内容が周恩来の考える正しい革命方策になるが、しかし、周恩来はいったい顧順章に何を要求したのか、顧順章の生活面だけを誹謗する穆欣の説明では分からない。

iii 顧順章の追放

一九三〇年五月のある日、中央軍委参謀長の聶榮臻は深刻な面持ちで顧順章の公館を訪ねた。聶榮臻は先に李立三のところに行つて、そのあとすぐに顧順章を訪ねたのであった。聶榮臻は上海に来て特科の工作に就いたばかりだった。

周恩来はいよいよ顧順章を特科から「調離」し、李立三の都市暴動路線から距離をおく決意をした。周恩来はその実行の役目を聶榮臻に依頼した。聶榮臻は勤工儉学運動とともにフランスに留学して以来の仲間で、周恩来がもつとも信頼の置ける同志であった。しかし、今回の計略は顧順章に疑惑を抱かせないで実行するにはかなりの工夫が要った。聶榮臻はその時の状況を回想録にこのように語っている。

「当時の特科は向忠発、周恩来、顧順章の三人が指導していた。恩来同志は決策人で、日常の工作は顧順章が責任を負っていた。向忠発は名前だけの責任者であった。

私を特科に移動させた意図は政治の上で特科を強化することであった。党中央は顧順章の飲み食い、女、賭博、アヘンなどの放縱な道楽を發見した。…当時はまだ叛変するとは思ひもよらなかつたが、ただ、このまま放置しておけば、きっと問題が起こるだろうと感じた。私が特科に移つて来たのは、彼の放蕩行為を終らせるためだったのである。

上海に来て李立三同志と会つてから、すぐに顧順章のところに行つて（着任を）報告した。顧順章は、私が転任して来たのは自分と対決させるためで、自分の放蕩行為にとつては不利になると猜疑した。だからいろんな方法で難癖をつけた。

私は特科の責任者だ、君に小さな靴を履かせよう（のつびきならぬ目に遭わせよう）としたら、君にはどんな方法があるだろうか（君はどうす

るのか)〃

彼は、われわれのグループが外国から帰ってきた者で、特科の工作をしたことはなく、はじめて上海にやって来て、土地も人も不慣れで、経験不足であることをよく知っていた。そこで、彼はこんな難癖をつけた。

「もっぱら君に何らかの非常に困難で危険な任務に赴かせたら、君は任務に赴かないと言うことができるだろうか? (私がどんな危険な任務を命じても、君は命令を遂行しなければならない)〃

だが、これ以上私を困らせることはなく、引継ぎの任務は、私はすべて完了した」

聶榮臻はこのくだりの回想を後年、党の顧順章の評価が定まったあとに書いている。したがって党史作家穆欣と同じように、聶榮臻の回想も「叛徒」の顧順章を前提にした観点で描かれた。そのため、聶榮臻が顧順章を訪ねたのは、彼の党規違反を糾^たし、放蕩行為を収束させることが目的であったように書いているが、顧順章を特科から「調離^{つひほう}」する本当の狙いはひた隠しにした。真実を隠すため、聶榮臻の回想はいくつかの事柄を切り貼りして話の辻褄を合わせようとしているのは、先の引用文からもよく分かる。

聶榮臻が顧順章と会ったのは、三〇年の五月のことだったという。では、聶榮臻の転任が上司の周恩来の指示であるなら、何時、命令を受けたのであろうか。周恩来は前述のようにこの年の三月のはじめにはモスクワに向かっていた。モスクワではコミンテルン政治委員会に出席し、またソビエト党代表大会で演説する榮譽に浴していた。七月の下旬、ソ連滞在のクライマックスとなったスターリンと会見し、滞在中、ずっと主張し続けてきた暴動の即時決行の否定と紅軍の顕著な発展状況を力説して賞賛を得ていた。周恩来が帰国するのは、八月十九日のことであつた。³⁹

そうだとすると、聶榮臻が五月に特科に転任し、そのあとに顧順章に会ったというのは辻褄が合わない。ただ、同じ聶榮臻の伝記を書いた周均倫・王紅雲によれば、⁴⁰一九三〇年八月、周恩来がモスクワから帰って来てまもなく、聶榮臻は中央軍委に移って来て、ふたたび周恩来の助手になったという。伝記の著者はこの年月を裏付けるために、九月に、娘の聶力が生まれ、家族は西摩路に住み、歐陽欽夫婦と一緒に住んだと記している。ちなみに、周均倫・王紅雲はこのあとのくだりに、前述した如く、三一年一月三十日に中央臨時政治局会議の決議で、周恩来、聶榮臻、陳郁、陳賡ら七人による中央軍委が組織され、周恩来が書記になり、聶榮臻が参謀長になったと述べる。この記述から、三〇年八月に顧順章が特科から「調離^{つひほう}」され、中共中央の情報工作が特科から中央軍委に移され、王明が特科の権力を握ると、周恩来の軍委が三一年一月にできたという筋書きになる。

一方、穆欣は党規に背反する顧順章の私生活を暴露したあと、顧順章の特科からの「調離^{つひほう}」はじつさい周恩来が持ち出したことだったと、こう説明した。

「一九三〇年の夏、中央は周恩来の意見にもとづいて、不慮の事故^{じたい}を防ぐために断固たる措置をとり、顧順章を武漢に派遣して工作させ、特科の工作は陳賡に替わって主持させることにした」⁴¹。

聶榮臻が周恩来から託された本来の使命を隠して書いた回想録は、あとから知り得た事実によって書いているから、話の時間的関係がまるで合わないし、顧順章との会話の内容も曖昧な表現となっていてなにか分からぬ。聶榮臻の会見の目的は顧順章を特科から追放する宣告であつたが、彼にはその根拠を見出せなかった。ほんとうは二人の間でどのような意見の応酬が行なわれたのかは、回想録からは判明できないし、じつさいは書かれなかったのではないか。そこで党規に反する「放蕩行為」

を取り上げて唯一の根拠とした。だが、聶榮臻は顧順章の「放蕩行為」を何時から知っていたのか、聶榮臻が会見した時点では知る由もないことだった。

聶榮臻は顧順章に関する情報をまったく知らなかった。しかし顧順章は聶榮臻に会ったとき、直感的に來訪の意図を察知した。顧順章はこの時、李立三路線に協調する自分は周恩来にとって邪魔者の存在であり、いざれ肅清されると思っていたかも知れない。現代の台湾のジャーナリスト、于明ははっきりと周恩来は顧順章本人を暗殺する計画だった述べた。^④後述するように、この指摘は意外にも事実であった。

では、聶榮臻は知り得ないことを根拠としてまで何を隠そうとしたのであろうか。それはおそらく顧順章を「調離」したあと、どのような方法で、どのように処理するか、さらにどの機関が行なうのか、という善後策を講じることであった。この処理はすでに方針が出来上がっていた。それが、さきほどの穆欣がいう、周恩来の顧順章追放の宣告であり、その追放の計画を聶榮臻に謀らせていたのであった。くり返して確認すると、周恩来はこう決断したのであった。

不慮の事態が起こるのを防ぐために、顧順章に対して断固たる処置をとり、非常に困難で危険な任務に付かせるために武漢に派遣することにした。この工作は聶榮臻を責任者とする中央軍委が担当し、これまでの特科は陳賡に交代させる。^⑤

しかし、事態は急展開する。三中全会の結果とその後の展開は周恩来にとつてまるで青天の霹靂の思いであった。

周恩来はモスクワから返ってくるただちにコミンテルンの指示を李立三と向忠発に伝達した。コミンテルンは、中共中央とミンテルンには

周恩来の誤算

表 I 三中全会（1930年9月）後の党指導部

総書記	向忠発
政治局：局員	向忠発、項英、周恩来、瞿秋白、李立三、関向応、張国濤
政治局：局員候補	羅登賢、徐錫根、盧福田、温裕成、李維漢、顧順章、毛沢東 トーマス・キャンペン 毛沢東と周恩来 三和書籍 55頁

路線上の違いはない。また中国革命の発展的な形勢に対しても少しも懐疑してはいない。ただ武漢暴動の問題においては、指導力の面でこの任務を実現できるかどうか心配だった、と説明した。周恩来の報告は、要するに革命の客観情勢は整っているが指導する力量、能力がないといういまの党中央自体を批判するもので、李立三個人に批判が向けられていたのである。当初、まだ李立三、向忠発は周恩来の

発言に強硬な姿勢を示していたが、周恩来はコミンテルンの権威を楯にはっきりと引導を渡した。^④「コミンテルンは李立三の誤りは路線の誤りだと指摘している」

周恩来はコミンテルンの本音を先に帰国した瞿秋白に語らせて李立三を恫喝した。すっかり萎縮する李立三に、周恩来はあとから穏やかな口調でなぐさめた。李立三路線を清算する三中全会は、しかし終始、瞿秋白の主導で進められた。のちに三中全会がコミンテルンから否定されると、主催者の瞿秋白が批判される。

周恩来は三中全会のまえに、政治局員の補選問題を解決し、毛沢東、李維漢、顧順章、温裕成の四人を政治局委員候補に選んだ。この人事は周恩来が提起していた「革命根拠地建設」の主張を重視する姿勢を表明するものだった。毛沢東と李維漢を選出したことによく表れていた。

三中全会が作り上げた体制は、通過した決議や党中央の人事の上からも周恩来の思惑どおりに達成したことは明白であった。じつは、筆者は別稿

で、六大以降の中国の政治動向について考察したことがあった^⑤。筆者はそこで、三中全会の体制は周恩来のかねてから主張していた、路線とまではないとしても、革命方策を表明したものだたと述べた。しかし、ここでもう一度よく考えてみると、周恩来に固有の革命戦略があつて行動していたのかはなほ疑問であつた。周恩来の本質は、四中全会で思いがけず批判される。調和主義者でしかなかったのである。

一九三一年一月七日、中共四中全会が上海の武定路修德坊六号で秘密裡に開催された。この会議は何から何まですべてが異常であつた。会議を招集したのはパベル・ミフというコミンテルン副部長で、コミンテルンの代表として秘かに上海に来て、会議召集の正規の手続きをとらず、緊急に政治局委員を招集し、強引に筋書きとおりの議論がくりひろげられた。では、四中全会でのミフの目的は何であつたのだろうか。

簡潔に言えば、コミンテルンに楯突いた李立三を中央の権威から引き摺り下ろし、コミンテルンの指示を遵守するミフの学生、王明を擁立することだつた。ミフは王明をさきに帰国させ、三中全会後も党中央に残つた李立三に攻撃を仕掛けた。李立三批判には羅章龍、何孟雄ら「右派」も加わつた。李立三は「コミンテルンの裏切り者」であり、李立三路線は「反マルクス主義の路線である」と断罪し、三中全会は「調和」の誤りを犯したと周恩来を暗に批判した。機が熟したのを見計らつて、ミフは上海に乗り込み、前後してモスクワから帰国したミフの学生たち、「二十八人のボルシェビキ派」を動員して、四中全会を開催させ、李立三に代わる王明の登場を画策した。

王明らの李立三に対する「闘争」は、決して路線闘争ではなかつた。のちに冠せられた名称であつたが、李立三の「左傾冒険主義」と王明の「極左冒険主義」は路線上でどれ程の違いがあるのか誰も判明できないに違いない。ミフがさかんに王明は李立三に代わる重要な人物であるかを

表Ⅱ 四中全会（1931年1月）後の党指導部

総書記		向忠発
政治局	常務委員会委員	向忠発、項英、徐錫根、張国濤、陳郁、周恩来、任弼時、盧福坦、（王明）
政治局	委員候補	羅登賢、関向応、王克全、劉少奇、温裕成、毛沢東、顧順章
中央委員会	委員	（王明）含む約30名
中央委員会	委員候補	（沈沢民）、（夏曦）含む約17名

注：28人のボルシェビキ派は（ ）内
トーマス・キャンペン 毛沢東と周恩来 三和書籍 71頁

宣伝したとき、王明は「国際路線の忠実な代表」であり、「国際路線」を擁護し、反コミンテルンの「李立三路線に反対する」「闘争的幹部」だと公言した。李立三と王明の路線の違いは、コミンテルンに従順であるかどうか、コミンテルンのために働けるかどうかに他ならないのであつた。

四中全会における周恩来は、針の筵に座る心地であつた。会場では「被告」の席に座らせられ、ミフの宣告をじつと待っていた。李立三と同様にモスクワに召喚されて「学習」する身になれば、政治生命は尽きてしまふ。しかし、李立三、瞿秋白、周恩来が党中央の権力枢要からいなくなれば、政治経験のなかつた王明ら「二十八人のボルシェビキ派」の書生集団では到底、政局を運営することはできなかつた。コミンテルンは周恩来と瞿秋白を天秤にかけ、三中全会までコミンテルンから期待をかけられ、今回の強引な要求にも「裏切るような態度を示さなかつた」周恩来をとどめることにした^⑥。

コミンテルンを代表する「国際派」（ボルシェビキ派—ソ連の政策を擁護し、コミンテルンの指示を遵守する一派、構成人員から二十八人のボルシェビキ派ともいわれた）を標榜した王明らの新しい党中央はその形成過程でまず反

対派の排除に着手し、さらに党内の各層各分野への「国際化」の徹底を図った。王明に追従することになった周恩来は王明の「党改革」の当初から係わった。

王明らの党改革とはいったいどのような内容なのか、周恩来の伝記作家のハン・スーインによれば、王明の「改革」は次のようであった。⁴⁷

二十八人のボルシェビキ派のリーダーは王明であり、一九三一年の当時、二十五歳になったばかりで、助手の博古もわずか二十四歳であった。彼らは国際団結（コミンテルンの言いなりになること）を最高至上の目標に置いたが、中国の実情はまったく考慮していなかった。彼らは中国共産党を国際化に徹底させようとし、上から下までの各階層すべてを新たに改組しようとした。現任要員は、ある者は降格、ある者は転任させられ、またある者は随意に粛清・排除された。のちに王明の欽差大臣と揄された政治局委員は特派チームを率いて各軍の軍事基地、各党支部に出向し、当地のボルシェビキ運動を貫徹させて、「右派分子」を取りのぞいた。中央特科の権限は、このときすでに王明側に傾いていた康生に握られ（康生は中央組織部長に就任した）、党内の彼らに対する不満の空気は十分に行きわたっていた。羅章龍、何孟雄ら非主流派分子は「二十八人のボルシェビキに反対する組織」を結成した。奇妙なことは彼ら三十六人全員が東方飯店で共同租界の工部局に一網打尽にされ、そのうちの二十五人が国民党に殺されたことだ。誰が国民党に密告したのだろうか。「康生だ」とみんなはささやいた。

周恩来は東方飯店事件と無関係ではなかった。羅章龍、何孟雄らは四中全会が終わろうとする間際、会議そのものが無効であることを宣告し、第二の中央を組織しようとした。東方飯店での集会はコミンテルンの指示だけを遵守する王明派に対する新しい中共中央の結成を目指す決起集会だった。周恩来は第二の党中央を組織することは反党行為であると警

告し、これ以上反党行為を続けるならば、除名処分になると脅迫した。王明が直接ではないにしても、東方飯店の集会を国民党に密告したのは疑いなかった。王明らの周到な「反右派」粛清計画のもとに行なわれたのである。「康生だ」とささやかれたのはたんなる噂ではなかったのである。⁴⁸

王明らが周恩来に「李立三派」、「右派」の粛清に協力するよう要求したことは、先の羅章龍、何孟雄らに対する周恩来の言動からも明らかであるが、東方飯店事件の当日、例の如く、周恩来は上海には居ず、事件とは無関係を装った。しかし、配下の陳賡を現場に待機させ、会合に参加した者が一網打尽にされる一部始終を見届けていた。このとき、おそらく李立三派の一員と見なされていた潘漢年は、東方飯店で逮捕された多くの者が、かつての文化界の統一戦線に結集した同志たちであったことに驚いて、江蘇省委の会議中の王明のもとに駆け込み、彼らの救済を訴えたが、「身から出た錆だ」、「奴らは反党の右派分子だ。反党活動をしたので捕まったのだ」と取り合わず、挙句の果て「お前が行って調べて来い」と怒鳴り返される有様だった。王明は事件が起こる前から事の成り行きを見通していたのである。

王明ら「国際派」が権力を掌握するうえで最大の障害であった羅章龍、何孟雄らの「右派」（反コミンテルン派の意）が半ば公然と粛清されると、四中全会のかれらの目的はほぼ達成した。王明の人事面での「国際化」はこのようであった。

李立三はモスクワに召喚されて悲惨な境遇に遭い、瞿秋白は王明の攻撃を受け、中央から排除された。向忠発は総書記の地位のままであったが、やがて井岡山根拠地（あるいは江西中央根拠地ともいう）に追いやられることになり、出発前、国民党に逮捕されて処刑される。ただ、向忠発が逮捕された経緯は、前章（本誌第五九八号）で述べたように、周恩来の

畏にはめられた可能性が高い。李立三路線のもとで宣伝部長になり、左翼作家連盟を結成するなど文化政策を推進した潘漢年は、前述のように明らかに李立三派の残党と見なされた。あとのことになるが、顧順章事件後に周恩来から特科へ配属され、陳雲、康生に代わって実質的な責任者となった。だが、党中央が江西の中央根拠地に移転したあとは、国民党へ供えられた体のよいスケープゴートであった。李立三の都市暴動計画に積極的に加わり、王明から李立三派と見なされていた顧順章は四中全会でも建前上、中央政治員候補に当選するが、すでに王明の革命路線の構想から外されていた。周恩来からも見放されて肅清の運命に晒されていたのである。

いまは辛抱するしかない、部下の聶榮臻に愚痴をこぼす周恩来が王明らの「国際化」に積極的に協力するようになるのは、東方飯店事件が大きな契機となった。四中全会では、軍事委員会と政治局から追放されても不思議はなかったが、政治局会議で十三人中六人しか解任に賛成しなかったため、周恩来は追放をまぬかれた。重要な問題はすべてミフが取り仕切っていた。何事も政治局では議論されなかった。当初、周恩来は毛沢東の中央根拠地に派遣されるよう希望した。その許可は一九三一年の春まで下りなかった。聶榮臻に、いまはひたすら辛抱するだけだと胸のうちを語ったのはこの時期のことであった。⁴⁹

王明路線といわれる「革命戦略」がいったい何を目指したのかははっきりしない。そもそも王明らが党中央の権力を奪取したのは李立三を失脚させて、党中央をコミンテルンに屈従させることが目的であったので、遠大な革命路線など想定されていなかったのである。

不明確な王明路線にはつきりとした方向性を加えたのは周恩来だった。周恩来は、どのようにして軍事根拠地（ソビエト区）と紅軍を強固にするかが党中央の切迫した問題だと説いた。王明は、ソビエト区と紅軍

を強化することは革命路線のコミンテルン化だと解釈した。そこで王明ら「国際派」はモスクワらしい仲間（二十八人のボルシェビキ派）を各地のソビエト区に派遣することにした。

項英、劉伯承らを江西ソ区へ、任弼時、夏曦らを湘鄂西と湘贛境界のソ区へ派遣したが、しかし、いまやいっそうの指導を強化するならば、すでに提案されていた中央をソ区に移転する案を実行に移さなければならぬと考えた。この提案はコミンテルンの同意を得た。

党中央の江西中央ソ区への移転に熱心だった周恩来は、この時、具体的な計画を提出し、即刻議決された。モスクワから帰国したばかりの老幹部、張国濤によれば、周恩来は以下のように計画したという。⁵⁰

党中央政治局は江西の中央根拠地（中央ソビエト区）へ移し、向忠発、周恩来、張聞天、秦邦憲らの指導者が行く。鄂豫皖と湘鄂西の両根拠地にそれぞれ中央分局を設立し、鄂豫皖は張国濤、沈沢民、陳昌浩が行って主持し、湘鄂西はすでに当地に居る夏曦、関向応らが主持する。中央が江西ソ区に移転したあと、上海には別に中央分局を設立し、白区（国民党支配区）工作の指導は趙雲（康生）、李竹声が責任を負うことにした。

張国濤はなお周恩来の計画の趣旨をこうも指摘している。すなわち、周恩来は極端に力量をソ区に集中することを主張した。周恩来は何度も迫害を経験していたので、中共は白区では足場とし難く、勢いつぎつぎと国民党に破壊されるであろうことを知っていた。そこで中共の大部分の幹部をソ区に移転させることを決意し、白区からソ区へ異動できる幹部を約四百人いると計算した。彼はその中の百分の四十を江西ソ区へ移し、余りを二分して、百分の三十をそれぞれ鄂豫皖と他のソ区へ異動することにする。⁵¹

三十年の夏、聶榮臻の訪問を受けて以来、顧順章は忽然と姿を消し、沈黙を貫いている。この間、おそらく周恩来の意を受けて、特科の情報

科の連中がさかんに顧順章に対する個人的な飛語中傷を党内に流していた。理由は、いうまでもなく李立三の都市暴動に献身する顧順章の行動が周恩来のコミンテルンにおける立場を不利にし、コミンテルンの信頼を失うと思ったからである。顧順章の存在はもはや周恩来にとっても、特科においても無用となったのである。特科がどのように彼を誹謗中傷し、風評を流したのか、もう一度、穆欣に語ってもらおう。

「顧順章の個人的品格面の悪劣な傾向は、この時も迅速に発展し、日増しに凶暴な個人的な野望を露わした。党との関係上では、傲慢で横暴であり、勝手な振る舞いをし、その行動はすでに容認できないほどに発展していた。生活面では腐敗堕落を極め、生活は爛れ、アヘンを吸い、「星相家」をたずねて人相、運命を占ってもらい、占い師に、貴方には福相がある、きつと将来、皇帝になるだろうと吹聴されることさえあった。顧順章は英租界威海路八〇五号石庫門に「公館」を設け、家具のインテリアはかなり凝っていた。『工作の需要』を口実にして、生活では豪華を極めた。当時、モーターバイクはまだ珍しかったが、すでに所持していた足代わりに使っていた。彼の家には陳賡と李強だけが行くことができた。陳賡は何度も行ったことがあるが、帰ってくると柯麟にこういった。『われわれ二人がもし死なずにいたら、間違いなく顧順章の叛変を見ることのできるだろう！』周恩来は何度も厳しく批判し、こう指摘した。『私生活の腐敗堕落は完全に共産主義道德の規則に背反する。彼は表面では従ったが裏では背いたので、しばしば注意されたが一向に改める気配はなかった』。

しかし、いぜん六大三中全会で中央政治局局員候補に挙げられた。三中全会は三十年の九月の末（二十四日から二十八日まで）、上海の麥特赫司脱路の顧順章が住んでいた機関の洋館で開催された。開会中、特科員全員が出動して安全保衛の責任を担った。三ヶ月後、三一年一月七日に開

催された四中全会でも顧順章は政治局委員候補に選ばれた。ミフが主持した四中全会は李立三、瞿秋白、周恩来を批判する会議であった。李立三は会議に出席する前にすでにモスクワに召喚され、周恩来は「被告」の席に座らされて宣告を待つばかりであった。顧順章も会議に出席した。特科は通常とおり会場の安全確保の任務を担った。深夜まで及んだ会議の警備は厳重で、まるで「大敵に臨む」ようであった。ある説によれば、顧順章は会議中、卓上に拳銃を置いてミフに楯突く反対派を威嚇した。顧順章の出席は政治局委員候補としての資格でなく、特科の任務を遂行するためだった。

それでもなお顧順章が中央政治局委員（候補）に選ばれたのは何故であろうか。それは六大以降の中共中央の人選はすべてコミンテルンの意向が働いていたからである。六大のある席でスターリンが、共産党はプロレタリアートの政党であるのに中国共産党には知識人の指導者しかいないのはおかしいと発言した。この指摘で急遽、党のナンバー・ワンの総書記に港灣労働者出身の向忠発が就任した。顧順章もこの時に中央委員に選出されたという。三中全会と四中全会の人選の名簿を作成したという周恩来はコミンテルンの意向に迎合しただけである。

顧順章がふたたび脚光を浴びることになったのは武漢の地においてであった。四中全会が終わってまもない三一年の四月、顧順章はとつぜん武漢の漢口に姿を見せた。待ち構えていた国民党の特務は顧順章を簡単に捕まえた。国民党政府があった南京に連行されると、顧順章はすぐに国民党に転向した。中国共産党からいえば、敵に裏切ったのであるから「叛変」に違いなかった。国民党からは、顧順章が国民党に移ってきたのは、自らがこれまでの過ちを悟って新しい人間に生まれ変わったということだ。「自新」といった。

しかし、顧順章の逮捕事件は国民党、共産党のみならず社会にも大き

な衝撃を与えた。とりわけ、中共特科の総元締め周恩来と国民党調査科(のちの中統)主任の徐恩曾は政治生命を揺るがす打撃を受けた。だが、顧順章の足跡は中国共産からも中国国民党からも抹殺され、ついに中国の現代史から消し去られた。顧順章事件とはいったい何であったのか、「叛変」でも「自新」でもない顧順章自身の真実があったのではないか。それを明らかにするのが本稿のねらいである。

次の章ではいくつかの観点から従来の論考の疑問点を整理して、事件の真相に迫って見よう。

2 顧順章事件の真相

1 顧順章の逮捕

顧順章がどこで、だれに、何時逮捕されたのかを確認することは事件全体の構図を明らかにするうえで重要な要素となる。ところがこれらの点について共産党、国民党の双方ともまるで故意に真相を隠蔽するかのよう論点をはぐらかした。

さまざまな「真相」が語られる中で、一つだけ共通する観点があつた。それは顧順章を加害者にする事で各自の政治的立場を正当化しようとしたことであつた。自己の正当化を図ろうとすれば、真相の究明より自己に有利な筋書きがつくられる。

何時、どこで、だれに逮捕されたのかもそうであるが、そもそも顧順章はなぜ武漢に現れたのか、目的は何であつたのかは、事件の発端になるのでまずここから考察してみよう。

顧順章の「叛変事件」は本稿の冒頭でも述べたように(本誌第五九八号)、けっして偶然に起こつたものではなかつた。どんな事件でもそ

が顧順章事件にも複雑な背景があつた。共和国が成立してまもない五十年代の初め、周恩来はある会議で事件が発生した背景に李立三路線と四中全会があつたと語つた。この発言に注目したハン・スーインは、前出の周恩来伝記に、顧順章事件は、王明ら「国際派」(ボルシェビキ派)が党「改革」に不満であつた顧順章に「叛変」させるよう仕組んだシナリオにまんまと乗せられた不幸な事件^①だつたと説明した。周恩来自身は事件の発生と無関係のようだが、王明の改革が背景にあるのであれば、周恩来はシナリオがうまく運ぶように舞台を作つた役割を果たしている。

王明は各級の党内の改革と各地の革命根拠地の「^②国際化」を強行した。各地の根拠地には王明派の「欽差大臣」(ハン・スーインは特派チームと呼んだ。漢訳は特勤組織)を送り、江西の中央根拠地に次いで重要な戦略地であつた湖北、河南、安徽省の境界に広がる鄂豫皖根拠地(彼らはソビエト区とも呼んだ)には、モスクワから帰国したばかりの張国濤が赴き、沈沢民、陳昌浩が同行した。沈沢民、陳昌浩はともに「二十八人のボルシェビキ派」の一員で、老党员の張国濤の監視役であつた。

三月中旬、張国濤はいよいよ鄂豫皖ソ区に入る準備をした。とりあえず、張国濤と陳昌浩は漢口をへて黄安に入り、沈沢民と妻の張琴秋は安徽の合肥から六安に行くことにした。だが、誰も根拠地の状況については知らなかつた。事前の知識では、そこには二つの小ソ区があり、一つは黄安、麻城、光山、羅山の四つの湖北、河南省境の県を含む郷区で、他の一地区は金家寨を中心に、六安、霍山、商城の三つの河南、安徽の辺境の県を含む地区であることが分かつていた。これらの地区と党中央との連絡ルートはできていたが、しかし、特科しか安全なルートを知らなかつた。周恩来は顧順章に張国濤らの「秘密旅行」のためのすべての手配を命じた。

このとき、顧順章は実際に中央と各地、各ソ区間の連絡網を管轄していた。張国濤はのちに「彼はほんとうに我々のために精一杯協力してくれ、自ら安全に漢口に送ってくれることになった。沈沢民の方は彼の助手が手配してくれた」と安堵感を語った。

かくて張国濤、沈沢民、陳昌浩らは鄂豫皖ソ区へ赴くことになった。鄂豫皖地区へは張国濤が自ら志願した。

「当時の鄂豫皖地区にはかなりの李立三路線の残余がおり、当地の指導者の曾鐘聖は有名な李立三路線の擁護者であった。同志たちは私が行って李立三路線の錯誤を糾正するのは簡単なことだと思つた。私自身もその一帯の状況をかなり熟知しており、加えて中原が好きだったので、馳騁（招聘に応じる）する所在^{ばしょ}としてはびつたりのところであつた。私はそのためにも惚れたのであつた」⁵⁷

ところで、顧順章は張国濤の「秘密旅行」を先導するためにだけに武漢に出向いたのであろうか。顧順章は逮捕されたあと、蔡孟堅に漢口に來た目的を訊問され、次のように答えている。やむなく、「自ら進んで困難を引き受け、こつそり漢口に遣つてきた」。だが、張国濤らを送つて漢口に行くことはいうほど困難な任務ではない。顧順章にはもつと大きな任務を命じられていた。蔡孟堅は直接顧順章から聞いた供述として、後年、陳独秀、張国濤らにこう語っている。

「当時、毛沢東は江西の匪巢^{ごんきやう}に盤居^{いすわ}り、上海租界の全国ソビエト主席向忠発が上海にある中央政治局の權威を笠に命を出して、匪区^{ソビエト}の軍事行動を一同に牽制を受けさせられるのを望まなかつた。そこで、あの向忠発が計画して、武漢および湘鄂の路^{ルート}を通じて井崗山に入り、中央組織を建設したらよいと建議した。同時に匪中央はモスクワから上海に帰国したばかりの張国濤に武漢を通じて鄂豫皖辺区（第二次国共合作後、ソビエト区は取り消され、辺区とした）へ派遣して軍区主任に就任させること

を決定した。張国濤は、武漢は「白色恐怖」の地区であるので、どうしても幹員^{うでまき}を派遣し、武漢で秘密裡に交通と掩護の件を按排してもらいたいと考えた。そこで顧順章は自ら勇気を奮つて漢口に行くことを申し出した」⁵⁸

毛沢東は党中央を江西の中央根拠地に移転しようとした周恩来に反撥して、新たに中央の組織を作るのなら向忠発が計画を立てて革命根拠地の原点である井崗山に建設したらよいと抵抗していたのである。

蔡孟堅はまた、張国濤を追悼した一文で、顧順章が漢口に來た目的をこのようにも述べている。

「私が武漢警察局長に出仕する三年前（一九三〇年）、私は武漢行營に任職して反共の任務を主持した。民二十年（一九三二年）四月初め、漢口で共党の中央常委兼特務の頭目の顧順章を捕獲した。顧が上海から危険を冒して漢口に來た目的は、一は、張国濤が漢口を経て黄安の七里坪に赴いて鄂豫皖辺区の中共分區書記兼軍事委員会主席に就任するのを掩護するためであり、もう一つは、中共「党」中央主席の向忠発が上海から漢口に行き、粵漢鐵道を経て井崗山に向かうのを掩護するためであつた」。

顧順章は張国濤の掩護だけでなく、党総書記の向忠発を中央ソビエトに送り届ける任務を負っていた。だが、蔡孟堅は故意に言ったのかどうかは明らかでないが、向忠発は井崗山に向かい、そこで党中央を組織する計画であつたという。井崗山に中央組織をつくることは毛沢東の建議だつたと顧順章から聞いていた。すると、顧順章が故意に話をすり替えたのかも知れないが、周恩来の計画では前述のように向忠発は江西の中央ソ区に配置する予定であつた。

江西の中央ソ区に転出されるのを嫌がった向忠発は監視する周恩来夫婦の目を盗んで逃亡し、国民党当局に逮捕される。向忠発はすぐに転向を表明するが、意に反して殺された。向忠発の逮捕は、顧順章の密告に

よったというのが通説であるが、それが顧順章の逮捕後ではなく、楊之華がいうように事前のことであった。顧順章が何故、密告したのかは分からない。周恩来の命令かも知れない。あるいはまた党中央に対する反撥であったかもしれない。顧順章が王明らの国際派に不信を懐くようになったのは、特科の権力が王明の股肱、康生に奪われからだともいう。

四中全会のあと、王明によってはつきりと粛清の対象となった顧順章は意図的に危険な任務を命じられた。無理やり「小さな靴を履かされた」のであった。周恩来の提案で各地の根拠地と党中央を結ぶ連絡ルートを確認する任務が課せられたのである。しかし、任務は達成し、各地との連絡ルートは顧順章の手によって開発された。

王章陵は『中国現代史辞典―人物部分―』に顧順章の項目を書いて、漢口出向の目的を次のように書いている。⁶⁰

「二十年（一九三一年）四月、上海から江西のソ区へ行き、黄金を携えて上海に戻る途中、武漢を経たとき、湖江魔術師に身を扮し、湖江芸人の身分で旅社に居住した。彼の任務は張国濤が漢口を経て黄安七里坪に赴くのを掩護するためで、また中共中央主席の向忠発が上海から漢口に赴き、粵漢鉄路を経て井岡山に転赴するのを掩護するためであった……」

顧順章はすでに中央ソ区と漢口の間連絡ルートを開発していた。このときもそうであったが、地方にでるとき、いつも全国を巡業する旅芸人の一座に扮装し、地元顔聞きと話をつけて交通の安全を確保した。地方の根拠地からは「黄金」などを持ち帰り、根拠地には菓や生活用品を運びこんだ。このような任務は危険であったが、顧順章にとっては意を得た特務工作であった。王章陵は後半のくだりを蔡孟堅の文章から引用したが、毛沢東の建策がもし上海の党中央に届いていれば、向忠発はこのとき、党から逃亡する決心をしたかも知れない。

やがて上海から党中央が江西の中央ソ区へ移されることになること、こ

のルートは中共の動脈となるはずであった。向忠発が向かおうとしたのは井岡山ではなく、江西の中央ソ区ではなかったのかと推測したのは最初に開発したのがこのルートだったからである。顧順章はずっと前から漢口に出発していた。このとき、顧順章の胸中にはさまざまな思惑が去来していたに違いない。それはどんな思惑であっただろうか。

ここで、顧順章の漢口でのほんとうの目的を探るために、張国濤の一行が上海を発つあたりまで話を戻そう。

張国濤がいよいよ出発するときに、顧順章はこういった。上海・漢口間を往来する野鷄船^{やみかね}がある、その船とは緊密な繋がりがあり、三月末に漢口へ出発することになっているので、これに乗ったらよい。わたし自身は先に漢口に行つて案内人を物色し、その者に黄安まで安全に送らせることにしたい。

顧順章はさらに細かく行動の段取りを説明し、張国濤はその手配に従つて実行することにした。張国濤は顧順章に絶大の信頼を置いていた。今回、会つてみると、その才能は敬服させるものがあった。ただ、風采や言葉づかいに多少、⁶¹海派^{かいはい}の気風があつたといつた。海派^{かいはい}というのは、少々やくざ風というニュアンスが含まれる。張国濤は、数年ぶりに顧順章と会つたとき、すでに広がっていた風評の先入観があつたのかも知れない。

四月一日に出航する野鷄船に乗るため、張国濤は三十一日の夜九時前後、南京路の新世界旅館に移つた。夜明け前の三時に乗船することになったが、顧順章は先に夜行列車で南京に行き、船に乗り換えて漢口に行くことにし、一日さきに着するはずであった。四月一日の夜明け前の三時、張国濤は一般の商人に扮装し、顧順章の助手は番頭に扮した。船の船頭客室に着いたとき、陳昌浩はさきに到着して、番頭に扮装していた。

四日の午後、張国濤らが乗った野鷄船はほどなく漢口に到着した。顧の指示で出迎えに来た青年に随って日本租界にあった隠れ家に直行した。この隠れ家は奥まった通りにあり、張国濤らは二階建ての家に着くと、顧順章はすでに待っていた。

顧は道中、何事もなかったことを知ると、早速、次の行動の段取りを検討した。顧順章は、ここから鄂豫皖ソ区までは漢口の連絡機関の人は護衛できないので、ソ区から派遣してくる連絡員を待つてから進入しなければならぬ。現在、信頼できる連絡員は少なくとも三日たたなければやって来ない、といった。さらに顧順章は、この隠れ家はすでに日本租界の密偵に疑われているので、ずっとここに住めるかどうか分からない。じつは、私は名の知れた「花広奇」の大魔術師で、漢口では何度か舞台に出ている。漢口では何人かの大商人や金持ちに先生として尊敬されている。その中の何人かと親密なつき合いがあるが、私が顧順章だとは知らない。もし、ここに居たくないなら弟子の家に移つてもよい。その人は大商人の家で、人に疑われることはないと打ち明けられ、張国濤は全然知らなかった顧順章の一面を垣間見ることになった。張国濤は移動を断り、三日間、息を凝らして連絡員の到来を待つことにした。^⑥

張国濤の回想はのちに中共を離れ、国民党側に転向したことから少々自己に有利なように語っているのは疑えないが、中共のために弁護する必要もないので、その回想はおおかた信用してよい。だが、張国濤は自己の関心ごとしか語らなかつた。そもそも、張国濤は漢口に発つまえに、ほんとうに顧順章と打ちあわせしたのであろうか。張国濤が日本租界に隠れ屋にたどり着くと顧順章が待っていた。まるではじめて出会ったようであった。ここではじめて彼の知らなかつた一面を見る思いであった。他の人が顧順章の悪評を言いふらすのはじつは後から知ったことだったのでよく分かる。

このあと、次の行動の段取りを検討する。このような顧順章の周到な手配は二三日でできるものではなかつた。顧順章は早くから漢口に来ていた何よりの証拠であった。

ところで、顧順章の助手として張国濤を漢口に送った董健吾は周恩来から機密の任務を受けた。董健吾の伝記を書いた党史作家の王光遠は、上海を出発する際の様子をこのように書いている。

「張国濤らが武漢に行くのを護送するために、周恩来は中央政治局委員、中央特科の指導者、顧順章が責任を負い、董健吾は助手となつてともに赴いた。張国濤は、資格は古く、名声は大きかつたが、一人の政治局委員を彼のために護衛させる必要はなく、顧順章を派遣した上に、さらに董健吾を助手として派遣する必要はさらさらなかつた。周恩来がこのような按排をしたのは深い含意があつたことだつた。顧順章の思想と態度を根拠に、周恩来は彼を中央から調離させようと計画し、彼を武漢に派遣したのは彼に対する最初の試練であり、董健吾を加えて派遣したのは、一つは張国濤を護送するためであり、もう一つは顧順章を監視するためであつた。彼らが出発するまえ、周恩来は董健吾を訪ねて二人だけの話し合いを持った。周恩来は……異常な情況を発見したら、すぐに中央に指示を求めるように告げた。董健吾は周恩来の意図を覚つた……」^⑦

顧順章もこれまでの周恩来の態度からうすうす異様な空気を感じていたに違いない。それでも平静を装つて張国濤らを舟に乗せ、自らは徒弟の張増謙、陳連生を率いて、ひと足さきに汽車で南京に行き、南京からふたたび舟で漢口に向かつたという。王光遠は総勢六人が漢口に向けて出発したと断言する。

董健吾が漢口でどのような役割を果たしたのかは次節で詳しく取りあげると、周恩来が顧順章を漢口に派遣した目的は、上記のように、張国濤の護送のほかに、顧順章を国民党の手に渡すことにあつたのではない

か。では、周恩来はどのような手段を考えていたのであるか。次の記録は驚くべき真相が語られている。

Frederic Wakeman Jr、フレデリック・ウエイクマンは、その著『Policing Shanghai』『上海警察』の中で、顧順章事件は蒋介石を暗殺する計画から始まったと述べる⁸³。

それによると、一九三〇年、江西の剿匪（第一次軍事圍剿 一九三〇年十二月～三一年一月）が始まると、蒋介石は武漢に遣ってきた。十二月、顧順章は中共中央―李立三の命令を受けて『CCP's Red Brigade』、紅隊を率いて武漢に来て蒋介石の暗殺を企てた。ウエイクマンは、しかし、ノウレンスが逮捕される（逮捕は三一年六月十五日）二ヶ月まえの四月に顧順章は『Guomindang's Special Services Bureau (SSB)』、国民党特別調査局の手に落ちたという。

ウエイクマンはこの記述を国民党調査科の責任者徐恩曾の報告書「消滅紅隊、暗赤経験簡述」〔国民党中央調査局档案所収〕によった。したがって、国民党側の見解をよく伝えている。その故、ウエイクマンの記述にはいささか事実の混乱が見られる。三〇年十二月といえば、中共党内の権力闘争がもっとも激烈なときであった。批判の槍玉にあがっていた李立三はすでにモスクワに来るよう命令を受けていた。十一月の末か十二月のはじめに李立三は上海を旅立つ。一方の顧順章はすでに特科の職責からはずされ、そのあとはずっと沈黙を守っていた。李立三にはもう顧順章に命令できる立場がなく、顧順章もまだ特科の紅隊を動員できる力があつたのかどうか不明であるが、しかし、これが周恩来の命令だとすればすべての辻褄が合う。

顧順章が武漢に来たのは蒋介石暗殺が目的だった。だから、顧順章は早くから当地に来て、入念に暗殺計画を立てていた。

「三一年一、二月の間、興行団一行が武漢に到達した。この団の花形は

黎明という名の魔術師で舞台の上では洋服を着て、大きな鼻と小さいひげをつけていた。公演は大成功で数ヶ月間、舞台に出たが、出演のとき以外はさほど離れていない太平洋飯店の部屋にいた。毎日、来訪する人はあとを絶たず、その中には何人かの共産党嫌疑者や高級国民党員がいた。これらの来訪者は武漢国民党特別調査局の頭目蔡孟堅の注意を引き、顧順章を、共産党と接触のある人物として監視した⁸⁴。

この間、顧順章は漢口から鄂豫皖ソ区の中心地の黄山七里坪、漢口から中央ソ区の瑞金、漢口から粵漢鉄道で井崗山にいたるそれぞれの連絡ルートの開発を進めていた。各連絡ルートの開発には魔術団の一座を組んでカムフラージュにした。連絡ルートが開発できると、漢口の劇場で自前の一座、魔術団の公演をして、まもなく遣ってくる張国濤、陳昌浩を迎え、ソ区の入りの李家集まで護衛した。漢口に戻ると、さらに向忠発の漢口への到着を待った。しかし、漢口の町での顧順章は社交界などで派手な振る舞いをしたので人目についた。まるでことさら国民党特務に自己の存在を見せびらかすようであった。

国民党側のもう一つの主張は、顧順章自身が早くから国民党に投降する意図があつたという説である。徐恩曾の上司で、国民党の特務機関のトップであつた陳立夫は、「抗戦準備工作に参加した回憶」の中で、国民党調査科が採用した「自首奨励政策」が多くの共産党員を味方につけたと述懐している。

「江西の共産党剿匪作戦の期間で、わが方のもっとも重要な工作は、後方を安定するために、共党が各省で秘密活動を起こす行動があれば、その都度破壊したが、私はわが方のこの工作を主持した責任者である。……私が採用した政策は浸透と招撫であり、殺戮を採らず、共党に自首自新させて、思想改造をし、能力のあるものはかつ雇用する。故に帰順するものはたいへん勇躍し、清党後の十年間、自首自新した人の数は二万人

に達し、そのもつとも著名な者は共匪方面の特工を主持した顧順章であり、また蔡孟堅との接洽^{はなれあひ}をへてこっそりと帰順した。彼の転向は共党各地の地下組織をすべて瓦解させることになった⁶⁵。

さらに、張文が述べた「顧順章事件は徐恩曾が直接主持して産^う生^まられたものである」という文言は、文字どおり事件の一部始終を国民党の調査科が主導したものだったことをいっただのである。次の陸掲守の一文は背景が不明であるが、顧順章が国民党当局に自首した事情をよく表している。それはこういう経緯だったという。

漢口に向かった顧順章は自分から国民党当局に自首することを決めていた。というのは、顧順章が自新（過ちを認めて生まれ変わる）こと、すなわち共産党から抜け出ることし、真夜中に転宅したのは、ひよつとすると周恩来らの卑劣で陰険な姿、共産党のあらゆる内幕を顧順章が見破つて、自己の是非を悔いたのかも知れない。そこで、彼が共産党の指令を受けて、漢口に赴いて某重大事件を処理したときに、きっぱりと共産党から離脱する覚悟を決め、漢口に着いたあと、すぐに国民党当局に自新し、ただちに南京に行つて当局の責任者にあつた⁶⁶。

上の表現では、顧順章ははやくから国民党に移ることを決めていて、漢口で実行しようとしたという。顧順章の「叛変」がとつと胸のうちにあつたことは、楊之華も述べていたように、顧順章が逮捕されたあと、特科が顧順章の家を搜索したところ、未投函の蒋介石宛の手紙を発見したことからも明らかであると、中共側は宣伝した。真夜中に家移つたというのはどういう状況をいっているのか、また漢口で某重大事件を処理したというのもどんな事件を指しているのか、ここだけでは確認できないが、上記のウエイクマンがいう蒋介石暗殺計画と関連していることは間違いない。

蒋介石暗殺未遂事件がじつさいにあつたことは、武漢で「鏟^{きようせん}共^{こう}専^{せん}家^か」

の異名をとつた蔡孟堅が事件を未遂に防ぎ、蒋介石から褒賞されたと語る回想がある。すこし長くなるが顧順章事件の動機になるので以下に引用しておこう。暗殺計画未遂事件とはこのような事件であつた⁶⁶。

……わたし（蔡孟堅）は民国十九年（一九三〇年）の秋間に、紅幫^{きやうほう}の協力によつて、すなわち自首した共党分子を打ち連れて大街小巷^{おうちやちやうちやう}で距離を保つて歩き、すぐに機動行動が採れるようにした。一ヶ月余りの期間、巡回を続け、指認^{さしめ}方法で多数の共党分子を捕獲し、共産党機関を破壊した。この年の九月末、閻錫山、馮玉祥、汪精衛連合軍が大敗し、……蒋介石は十一月下旬に、宣誓して職に就いた二週間後、南京を離れて西巡し、廬山で第一回剿匪軍事會議を招集した。会后、武漢を巡視する予定だったので、武漢の各界は討逆勝利大会の準備をした。思いもよらず共党が入り込み、準備会の工作に加わつて、危害を及ぼそうとした。蒋介石が武漢に来訪する数日前のある日の午後、とつぜん、報告を受け、すでに捕獲した重要共匪、夏華（それとも夏華という名前なのか、当時の記憶ははっきりしない。四川の人である―原注）が厳しい取調べに自首したいと願ひ出たというので、わが方の上級責任者に直接会つて重要事件の内容を報告した。私はただちに夏華を呼び出して、二人きりで話をした。彼の供述によれば、数日後に武漢の軍民が漢口総商會^Bで蔣総司令を歓迎する討逆勝利大会を挙行することになっており、この大会の準備工作は完全に彼らに任されている。事務員の多くは共産党幹部であり、通知書の作成、入場券の発行の作業は、彼ら（共匪）が請け負っている。共党はすでに五人がグループを組んで、二十四のグループを組織しており、みんなめいめいが手榴弾を持って参加する。蔣総司令が演台に上がるときを定めて、台下の共党がいつせいに壇上に向けて手榴

弾を投げつけることになっている。もしも信じないのなら、私はすぐにも歓迎の準備会に参加する共党の名前と住所を書き出すので、捕まえて来て訊問したら、事件のすべてを破壊することができ、また爆弾の所在を探し出せると話した。この供述にはびっくりした。わが党はただちに行動を採り、事件のすべてをことごとく破壊した。私はすぐに陳立夫先生に電報で報告すると、九江に赴くよう促し、本人が到着するのを待って、いっしょに廬山に登り、漢口に出発しようとしていた総司令の蔣公に拝謁した。私がすべてを報告したあとに、過分の賞賛を受け、報獎金二万元をたまわり、また直接私を少将参議に命じられた。……領袖蔣公に危害を加えようとした要犯を訊問する中で、七人（そのうち女犯人が二人）が手柄を立てて罪を償いたいと、強く自首を求めてきた。私は自首政策を用いることは、不断に斬獲（斬首といけどり）はあるが、いわゆる「七擒七縱」（「蜀志諸葛亮伝注」敵を七たび捕らえ、七たび逃がしてやって、ついに心服させたという故事）は得策でないでもなかった。……

彼らはみな知識人で、第一歩は、救命を求め、自身の組織と絶つことを惜しまない。第二歩は、後悔したことへの誤りを感じ、第三歩は、ふたたび政治欲を取り戻し、第四歩は、もう一度、共産党に叛変する。彼らはのちに、かつて上海の共党中央から秘密に私を謀殺するよう命じられていたことを供述した。また、彼らに七千五百元の活動費を与えていた。……民国廿年（一九三二年）二月廿一日の晩は、彼らが雑誌を作る準備会議の夕であり、また私を謀殺しようとした時刻であった。そのとき私の秘密無線電信機は武漢行営裏のある里弄某号の楼にあつた。階下はそのとき漢口市党委単成儀の住いで、共党自首分子もまた近くの弄堂内の某号のある楼に住んでいた。そのじつ、私が最初に知りあつた自首分子の宋恵和に対しては十分

に信任しており、私の身边秘書に等しかった。宋某は自首分子全員の眼中の釘になっていた。その晩、私は単の家でマージャンをしていた。私は宋を先に雑誌創刊準備会に赴かせた。しかし、宋は何度も単の家を往復して、みんなは指導に出席を請うていると催促した。そのとき私は十三元を賭けていたので、本銭を取り戻さなければ席を離れたくなかつた。そのため何度も会議に行くのを遅らせた。ところが、この謀殺犯ら（男女七人）がすでに夜十一時に出航する上海行きの汽船の切符を買っていたとは思ひもよらなかつた。会場場所に私が到着したら、昼間に磨きあげた何本かの菜刀（菜切り包丁）で、まず綿花で私と宋某の口をふさぎ、いっせいに謀殺しようと待ち構えていた。しばらく待っても私に来ず、しかも汽船に乗る時間が近づいていたので、原の計画どおり宋某だけを惨殺するしかなく、この凶悪犯らはともに上海行きの汽船に乗った。宋の頭頸は十余の刀で斬りつけられ、耳は割れ、手は断たれていたが、まだ気を失っていないかつた。痛苦呻吟の聲が階下の房東に届いて、助けられた。

私は知らせを聞いたあと、拳銃を持って現場に駆けつけ、電話で警備部にこの夜に上海に出航する汽船を伝え、すべてを拘留し、それぞれ包囲して検査した。この謀殺共犯は、一人は河に飛び込んで逃亡したが、他の六人はともに逮捕し、行営軍法処の審判に送って処理し、炯戒を表した。……

上記の回想によれば、蒋介石暗殺計画は大掛かりで周到に計画されていた。しかし、華夏（あるいは夏華）の密告によって簡単に未遂に終わってしまった。実行グループは、五人がグループとなって組織され、総勢百二十人が歓迎会の会場を埋め尽くし、蒋介石めがけていっせいに手

附図 漢口市街図
1921年当時

周恩来の誤算



- A 太平洋飯店……25頁
- B 漢口總商会……26頁
- C 武漢行營……27頁
- D 漢口特三区（以前は英租界）の
小ゴルフ場前……32頁
- E 大智旅館……32頁
- F 江漢関……33頁
- G 輪渡埠頭……33頁
- H 中山路（前中正路？）……33頁
- I 三教街西側の二碼頭から三陽路口
北冷落角の阜昌街付近……33頁
- J 新市場……33頁
- K 三教街西段三岔路口……33頁
- L 怡園近くの世界飯店……34頁

榴弾を投げる手はずだった。成功すれば、蒋介石の身は一瞬にして木っ端微塵となる。ところで手榴弾はだれが調達するのか、調達できてもどう扱うのか、実行の手順はどうするのか、これらの計算は専門的な知識と技術が必要となる。この事実は、この暗殺計画が当初から顧順章や武漢の軍委が深く係わっていたことを奇しくも証明することになった。そうすると、この計画を水の泡に帰した華夏という人物はいったい何者なのか、彼は密告したあと忽然と姿を消す。架空の人物かも分からないが、蔡孟堅がこれほど重要な人物を覚えていないというのは不自然だ。

そもそも暗殺計画自体が顧順章を叛変させるために仕掛けられたシナリオであったのではないかと考えられる。

さて、次の推測は事実に近いかも知れない。すなわち、顧順章はこの年、一、二月に漢口に来て、湖北省委と軍委を動員して暗殺計画の実行グループを組織した。計画は細かく決められた。しかし、計画がある段階までですむと、顧順章は予定どおり華夏に計画を密告させ、この時点までの「重大事件の処理をした」あと、顧順章は共産党からの離脱を決断し、その機会を窺っていた。蔡孟堅への密告は計画どおりであったのか、すでに王明の特科か、周恩來の軍委との間に秘かな提携が取り交わされていたのかも知れない。

それにしても、たとえ未遂に終わったとはいえ、国民党、国民政府の最高指導者の暗殺計画があったことは、共産党対策の責任者の蔡孟堅にとっては重大な責任問題であったろう。ところが、蔡孟堅は「過分の賞賛を受け、報奨金一万元をたまわり」、そのうえ参議に昇任した。

百二十人のうち、何人の重要犯が逮捕されたのか分からないが、そのうち二人の女犯を含む七人が功を立てて罪を償いたいと申し出る。しかし彼らは党中央から蔡孟堅の謀殺を命じられており、かつ多額の活動資金が与えられていた。彼らは雑誌を作る会合を開くことを口実に蔡孟堅

と彼が信任する元共産の宋恵和をおびき寄せ、その場で殺害する手はずであった。蔡孟堅はマージャンに呆け、宋をさきに会合に行かせた。七人の犯人たちは宋恵和を殺害して上海に逃亡を図る。一人は逃げたが、他の六人は逮捕されて行営軍法処の審判に付された。処刑の判決を受けた尤崇新は再度自首し、手柄を立てて罪を償う機会を与えて欲しいと血判書を出して懇請した。この尤崇新が顧順章を発見することになった。

後段の話の筋道も上手くでき過ぎている。まず、蔡孟堅を謀殺しようとした七人の犯人たちの動機が希薄である。犯人たちの当初の目的は宋恵和だけを殺害するはずだった。逮捕されて拘束されているはずなのに、何時、党中央から指令を受け、活動資金を受け取ったのか、蔡孟堅を謀殺する理由は何であったのか、動機がはっきりしない。

また蔡孟堅がわずか十三元の本銭を取り戻すために会合の場に行くのが遅れたため、謀殺を免れたというのも話の展開としてわざとらしい。ここで登場した人物で、顧順章の逮捕に直接関係するのは蔡孟堅と尤崇新だけであった。ここから推測すると、後段の話は、尤崇新という顧順章の逮捕にもっとも貢献した人物を登場させるために作られシナリオではなかったのか。ただ、このシナリオは国民党側が単独で作成したのか、それとも中共特科との合作なのかは、事件を推理するうえで重要な鍵となる。事実はこうでなかったのか、すなわち、一方が顧順章の予定行動を密告し、そのあとどうするか、その処理は他方に任せ、というのが事件の構図であろう。一方が誰で、他方が誰かはおのずから明らかであろう。

さて、ここで顧順章逮捕のキーマンとなった尤崇新についてももう一度検討を加えておこう。国民党調査科（の中統）の天津派遣員で、のちに武漢に移ってきて中共組織の摘発に当たっていた黄凱は、顧順章の逮捕は国民党の特工に大きな鼓舞を与え、とうとう一匹の「大魚」を捕獲

したという感慨を懐かせたと語る。それは国民党当局がいかに躍起になって顧順章を捜索していたかという執念の気持ちを表していた。これは顧順章逮捕に南京の上層部の命令がいかに厳格であったかを物語っている。

顧順章がどのようにして網に入ったのか？ これは尤大麻子が逮捕されたことから話を始めなければならぬ。どういうことか？ 尤大麻子は尤崇新のあだ名、アヘン吸いの尤と呼ばれていたらしい。他に尤無魂、淤浮ともいった。原名は淤中興である。出身地は不明であるが、古くから中共の地方組織で工作していたらしい。李強は尤崇新と王竹樵は同一人物であったと回想している。そうすると武漢時代の中央軍委特務科で李強の部下であった。このあと、上海滬西区委書記となり、三十年の末、武漢市委書記、中共長江局の責任者となった。漢口市委（黄凱は長江局という）のとき、当時、国民党湖北省公安局長であった蔡孟堅によつて逮捕される。督察長であったかつての叛徒黄佑南が手引きした租界捕房と合同の捜索であった。

ところで、蔡孟堅は尤崇新と深い因縁があったはずだ。前述の蒋介石暗殺計画事件を想起すると、三十一年二月の末、蒋介石暗殺計画が失敗し、七人の自首犯はまた蔡孟堅の謀殺を謀った。蔡と助手の宋恵和を殺害したあと、上海に逃亡する計画であったが、蔡孟堅の手配で警備部に再度六人は逮捕され、行営軍法処に送られた。これによれば、蔡孟堅謀殺犯の尤崇新は一度逮捕されたあと自由な行動をとっている。さきの記述には、尤崇新は漢口市委であったとか、長江局の責任者であったという。自由な身であった尤崇新と市委、長江局責任者の尤崇新が同一人物とすれば、あり得ない状況が存在していたことになる。その後の尤崇新は獄中で再度自首を願ひ、血書を書いて手柄を立てたいと申しで、顧順章の逮捕に貢献する。蒋介石暗殺計画とその後の蔡孟堅謀殺未遂事件

に尤崇新は誰の指令によつてどのような役割を果たしたのか。尤崇新は顧順章事件の中に現れる多くの謎の人物の中の一人である。ちなみに、尤崇新は人民中国成立後、郁伍文と改名し、新華社に入るが、五十五年の「反革命鎮圧運動」で処刑されたという。

顧順章事件は蒋介石を暗殺する計画から始まった

顧順章事件は徐恩曾が直接主持して産生されたものであった

この二つの文言はともに真理であり、顧順章事件を解明するうえで重要な手がかりであった。

さてここで、ハン・スーインが聞き出した王明が演出した顧順章叛変計画の真相の謎解きをおこよう。ハン・スーインが聞いた顧順章事件の「真相」とはこうだった。

「顧順章事件は、王明ら国際派が党改革に不満であった顧順章を叛変させるよう仕組んだ演出にまんまと乗せられた不幸な事件であった」

王明はどんなシナリオを書いて叛変させようとしたのか。シナリオの結末からいえば、顧順章に蒋介石暗殺計画を命じ、一方で、その計画を国民党当局に密告し、顧順章を敵の手に渡して殺害してもらおうという筋書きだった。途中で発覚しても顧順章にはもはや帰るところはなく、国民党に身を寄せるしか生きる路はないであろう。ただ、中共側の大きな誤算は、国民党当局にただちに処罰されるはずだった顧順章が却つて優遇されて迎えられたことだった。

ところで、蔡孟堅の回想では顧順章自身が暗殺計画を国民党当局に漏らしたように見える。

蒋介石暗殺計画のシナリオは特科の権限を握った康生が作成したのではなからうか。東方飯店事件も康生の仕業だった。王明はこの時、向忠

表Ⅲ 周恩来の顧順章肅清実行グループ

周恩来	聶榮臻	顧順章肅清グループの統率者、軍委参謀長、30年、特科に移籍、顧の叛変をいち早く鄧穎超に伝える
	李強	顧順章の叛変前、最も接触のあった人物、顧の家には陳賡と李強だけが出入りできた。李強は張国濤らが武漢に行ったときの舟は洋泰木行船であったという。顧順章の逮捕の情報を最初に入手し、この情報を聶榮臻に伝える 武漢軍委 特務科特務股長、部下に老白臉、小白臉、王竹樵がいた情報股長に董胖子（董醒吾、董省吾）がいた
	陳賡	顧順章後の特科の責任者
	李克農	陳賡の部下、錢壯飛、胡底と特別チームを組む
	錢壯飛	浙江呉興人、徐恩曾の機密秘書となり、顧順章逮捕の情報を始めて得る、李克農の娘婿、李と同一人物説
	胡底	
	劉杞夫	錢壯飛の娘婿、南京特務の雑役
周恩来	錢淑	錢壯飛の娘、劉杞夫の妻
	董健吾	顧順章の監視役、顧順章の武漢での行動を周恩来に報告、事件後、党と連絡が途絶える
蔡孟堅	尤崇新	武漢で中央軍委特務科、李強の部下 原名游中興、仮名尤無魂、游浮、上海滬西（東）区委書記、30年末、武漢市委書記、31年1月、国民党に逮捕され、転向、解放後、郁伍文と改名、新華社に入る、52年の鎮反で処刑
	王竹樵	最初に顧順章を発見、尤崇新に伝える、武漢紗廠の労働者、工人武装糾察隊に参加、さらに武漢の中央軍委特務科で工作、李強の部下、李強は尤崇新と同一人物だとする
	宋惠和（周大烈）	中共漢口行動委員会の成員、30年9月に国民党憲兵隊に逮捕され、叛変後周大烈と改名。密査員となる。

表Ⅳ 顧順章の旅芸人一座、顧順章の配下

顧順章	陳增謙（陳蓮生）江蘇の人、事件時20歳くらい、あだ名は小白臉、仮名張阿林、張文農、顧順章と師弟と呼び合った
	童国忠
	蔡飛 あだ名は老白臉、武漢軍委時代の李強の部下
	張崧生 中央軍委駐漢口交通主任、4月25日、顧の出演後、接触、同時に逮捕される後に、張曉行と改名、55年の重慶市中級人民法院で、反革命罪で有期徒刑6年に処せられる
	胡長元 林金生の表兄、またの名は胡洪濤、顧順章の秘書、黄埔軍校第四期卒業、在校時に共党に入る、南昌起義後、上海で地下工作に従事、顧順章が原因で逮捕され、その後叛変

発の追放も指示したに違いない。王明はこれを周恩来に命じた。周恩来は早くから顧順章の追放を決めていたから、両者の思惑は一致した。周恩来はこの話を聞いたとき、顧順章には各根拠地との連絡ルートの確保もやらせたいと伝えた。その期間に顧順章が国民党当局に逮捕されるよう想定した。周恩来はこの計画を聶榮臻の軍委に立てさせた。この年の一月に、周恩来の意図で軍委が新たに組織されたのは、顧順章の肅清計画が具体化したときであったろう。聶榮臻をリーダーとする作戦の実行グループが結成されたのだ。

陳立夫は、さきに自分が採用した自首新政策の最大の成果は顧順章の帰順であったと述べた。顧順章は蔡孟堅と接洽してこっそりと帰順した。蔡孟堅との接洽は、顧順章が漢口に来る前から話を通じていて、顧順章の条件を接洽^{はなしあ}って合意し、こっそりと南京に行ったのか、あるいは、逮捕されたあとの蔡孟堅との取り引きを指しているのかはつきりしないが、陳立夫がいう意味は前者の状況を指しているように思われる。張文がかつて述べたように、顧順章事件は徐恩曾が主持して生まれ

たものであったということから見れば、陳立夫の回想と辻褃が合う。さて、顧順章はどのような状況のもとで転向したのであるうか、「新」なのか「叛変」なのか、さまざま動機が考えられたが、その動機によって逮捕された様子もさまざまに描かれた。

まず、現場で顧順章を逮捕した国民党当局の記述を見ておこう。蔡孟堅は先に引用したくぐりに続けてこう語る。

……前述のように、私（蔡孟堅）と宋某を謀殺しようとした自首再犯六人は訊問に付された。その中の一人に共犯の尤崇新がいた。まえば共党江蘇省委で、のちに漢口市委に転任した者で、逮捕されたあとに自首し、ふたたび叛変した。獄中でもう一度自首して功を立てて罪に報う機会を与えて欲しいと求め、指を噛み切つて血書を書いて願ひでた。この人は分析頭脳があり、文筆も上手く、私はもう一度、生きる機会を与えることにした。再度、派員が尤崇新に随つて街頭に出て、あちらこちらを偵察して、引き続いて共匪を探した。某日（民国二十年四月二十日前後）、尤某は漢口特三区（以前は英租界）の小ゴルフ場前で、かつて一度上海暴動で追従したことのある総指揮の顧順章（逮捕された時は三十一歳）と別の共黨員が街頭で接触していた。尤某は知人であることを確認し、大声で「暴動総指揮」と呼んだ。顧は自ら否認するすべがないのを知ると、すぐにおとなしく縛に就いた。顧の態度は平静で、宿泊している大智旅館についてきて欲しいといい、荷物を片付けると、真つ先に蔡孟堅に会いたいと要求した。彼はこういった。「私は、蔡が武漢の共党に対処する責任者であることを知っている、（顧は上海に共党の幹部を派遣して、わが中央の対匪を主持する調査科に潜入して機要秘書となり、とつくに匪中央に各省の対匪闘争の主管名簿を提供していた―原注）」私はすぐ

に顧に会いにくるようだったが、顧はただこういっただけだった。「私には共産党に対する大計画がある。どうか速やかに本人を総司令に会わせてくれるよう取り計らつて欲しい、私はじかに陳情する」彼の態度は冷静で、その他のことは話そうとはしなかった。

蔡孟堅の証言はこの事件に対する国民党のほぼ正式の見解と見てよい。ただ、捜査、逮捕、訊問、報告を受けた人によって記述の内容が異なっていることがある。事件に直接係わった人の説明であるので、それぞれすべて事実を述べている。内容が異なるのは記録した人のそのときの立場によって強調する場面の違いがあつたのである。蔡孟堅の上記の証言は逮捕時の真相の全体を語つたのではなく、共産党に対する政策が正しかった、じつさいの事後処理が正しかったことを述べたのだ。逮捕したあと、何度も裏切る尤崇新に温情を持つて許したことが顧順章の逮捕につながつたことを強調した。

だから、蔡孟堅から報告を受けた上司の徐恩曾も、同じ蔡孟堅の行動に対して異なる描写をする。

漢口に遣つてきた顧順章をずっと監視していた蔡孟堅は、顧順章が滞在していた飯店を出て散歩に出かけたのを見計らつて、機会を狙つて顧順章の写真を撮つた。蔡孟堅は写真を南京の特別調査局総部（調査科本部）に送り、黎明かどうかが分かる人に見てもらつた。返つてきた言葉は、この黎明なる人物はじつさいの泣く子も黙る中共紅隊の責任者の顧順章である、ということであつた。調査局局长（調査科主任）の徐恩曾是蔡孟堅に顧順章を逮捕するよう命じ、かつ、ただちに輪船招商局の汽船で南京に連れてくるよういっただけだった。

徐恩曾是顧順章の逮捕は南京の国民党調査科が積極的に指令を出して進めた作戦だつたと強調した。南京の総部は漢口での顧順章の行動を逐

一把握していた。蔡孟堅に嚴重な監視を命じていたのである。

徐恩曾の部下、張文は調査科の組織と活動を詳細に書きとめた(細説中統局)。顧順章逮捕時前後の状況も直接関わった訳ではないが次のように書き残している。²²⁾

「三十一年三四月の間、蔡孟堅は中共叛徒黃佑南の指引^{てびき}で、武昌で中共湖北省委を破壊し、省委書記夫婦は二人とも逮捕され、ついで殺害された。そのあと、蔡孟堅はまた人を率いて漢口仏租界で租界捕房^{けいこう}と合同で中共長江局の責任者尤崇新を逮捕した。この人はいろんな方法の威脅利誘^{おどしやすかし}のもとで中共地下党の活動を告白した。蔡孟堅はまた尤崇新を別の姿に扮装させ、同時に特務数名を派出^{くわいだ}して、こっそりと彼らを随えて漢口の各大馬路を行き来し、知っている中共黨員を探させた。一九三一年五月(旧曆?)のある日、尤氏は江漢関からさほど遠くない輪渡埠頭付近で、偶然に中共中央保衛小組^{グールシ}の責任者顧順章を発見し、大声で、^シ彼だー彼だ!と叫んだ。この時、顧は逃げ切れず、ついに追尾の特務に逮捕された。

蔡孟堅は顧順章に軟化誘叛(まるめこんで裏切りを勧める)を進めるために自ら接待し、煙草や茶を勧めたが、顧は一言もしゃべらなかつた。そのとき、蔡は顧にこういつた。^シわれわれは、面識はなかつたが、私はあなたを知っている。あなたもきつと私を知っているだろう^シ つづいてまた威脅^{おどか}していつた。^シあなたはわたしの性格をすべて知っているだろう。いつさい多くを語ることはない。生きたいなら、知っていることを話さない。いやなら死があるだけだ^シ 顧はなお態度を表さなかつたので、最後に蔡はこういつた。^シわたしは君を南京につれて行くことに決めた。君自身がよく考えて、自分の前途を選びなさい。^シ 蔡孟堅は南京に報告したあと、すぐに陳立夫、徐恩曾の指示によって、中統の特務三名を率いて、顧^{かせん}を江輪^{かせん}で護送して南京に送った」

蔡孟堅も張文も手引きに利用した尤崇新が顧順章を知らないように述べているが、前述のように顧順章が蒋介石の暗殺計画を指図したのであれば、漢口市委の尤崇新も重要な役目を担ったはずであり、だから逮捕されたのであって、顧順章は彼を知らないはずはなかつた。顧が逮捕された場所も異なっている。直接、訊問したという黃凱は、顧順章の探索は汽車の駅、汽船の埠頭が中心であったと語り、期限の最後の日、中山路^Hで顧順章を発見し、逮捕したという。²³⁾ 後年、顧順章の後妻を訪ねて新しい情報を得た孫曙は、顧順章と張崧生(中央軍委駐漢口交通站主任)が映画を観て、三教街西側の二碼頭から三陽路口北冷落角の阜昌街付近で逮捕されたとする。²⁴⁾ 現代作家の王光遠は、二十四日の午後、新市場の舞台を終え、張崧生と接触したあと、三教街西側の三岔路口^kを北に曲がったところで尤崇新に発見されたと述べている。²⁵⁾ 王光遠が記す場所は孫曙とおそらく同じところであろう。ちなみに穆欣は、二十四日に叛徒王竹樵は江漢関の門口で顧順章と出くわし、追跡して逮捕したという。²⁶⁾

中共側だけが顧順章を発見したのは王竹樵だという。これについて穆欣はこう説明している。一九七九年五、六月の間、昔、中央特科で工作した李強、劉鼎、陳養山、柯麟が集まって中央特科の思い出を語ったとき、みんなは顧順章を発見したのは王竹樵だといつた。一九八一年十月、李強はある座談会でこう発言した、われわれは上海で顧順章が王竹樵に発見されたことを知った、これは上海のわれわれに知らされたものであった。ある人が書いたものは叛徒尤崇新であるが、そのほかの情況は同じであった。顧順章の小舅子^{ぎてい}、張長根も材料を書いた、彼の根拠は顧順章が捕らえられたあと、彼も南京に行った。彼も王竹樵と書き、われわれと同じであった。世界飯店^し、なんという舞台に上がったについても完全に一致した。私はおそらく一人だと思ふ、彼は名前を変えていたので、

顧順章は彼を知らなかった。おそらく二人ともいた、王竹樵もいたし、尤崇新もいたであろう。顧順章は王竹樵しか知らず、他の人は知らなかった。彼は張長根に王竹樵といったのだ。^⑦

李強にとつて、顧順章を発見したのが尤崇新であろうが、王竹樵であろうがどちらでもよかった。後の中国共産党の関心は、顧順章の叛変は中共中央を危機に陥れたが、国民党の中枢機関に潜り込んでいた錢壯飛が、いち早く顧順章の逮捕を上海に伝え、冷静沈着に対処した周恩来によつて党中央の絶体絶命の危機を救ったという「事実」であった。したがつて、顧順章事件の過程において、徐恩曾の機密秘書になつて顧順章逮捕の情報を入手して、機敏な行動で周恩来に伝えた錢壯飛がクロースアップされ、党中央の機関と指導者の安全を図つた周恩来の偉大さが称えられた。

しかしながら、これまで見てきたように、顧順章事件はけつしてこのように展開したのではなかった。ここには李立三路線、四中全会における周恩来の陰謀が故意に隠されていた。では、周恩来の陰謀はどのようなシナリオによつて隠蔽されたのか、次節において探求してみよう。

注

- ① ボリス・スラヴィンスキー、ドミートリー・スラヴィンスキーの『中国革命とソ連』によれば、上海のストと蜂起は、ソヴィエト顧問A・A・フメリヨフが作成した計画によつて実行された。蜂起を準備するとき、さまざまな経路を通じてソ連の武器・弾薬が労働者部隊に送られたという。顧順章の役割を想起させよう。邦訳共同通信社 二〇〇二年一四五頁
- ② 中共上海市委党史研究室編『周恩来在上海』上海人民出版社 五〇二頁
- ③ 顧順章の肖像は拙稿「周恩来の誤算—顧順章事件の真相—」《立命館文学》第五九八号の挿絵を見よ。

- ④ ①と同じ 一四二頁

④ 顧順章は国民党に転向したあと、軍統の戴笠と往来し、中統の徐恩曾と対立した。中統は顧順章を軟禁し、一九三四年、蘇州の反省院に入れられ、翌年、蘇州（一説では鎮江）で秘かに銃殺された。顧順章が徐恩曾に銃殺されたのは、命令に服従せず、独りで一幟を樹てたという理由であった。陳蔚如「顧順章の死」（『中統特工秘録』所収）及び盛顕輝「墜落中の余生」（《党史縱横》一九九四年四月）を参照

⑤ 杜 寧「叛徒顧順章叛变的経過和教訓」（《党的文献》一九九一年第三期）

⑥ 李盛平主編『中国近现代人名辞典』中国国际广播出版社 一九八九年 二一九頁

⑦、⑧ ⑤と同じ

⑨ 向忠発が周恩来の監視から逃れ、国民党当局に逮捕された事件については、②の拙稿「周恩来の誤算—顧順章事件の真相—」を参照せよ。

⑩ 穆欣は一九八〇年に「周恩来同志領導的一场惊心动魄的闘争」（《人物》一九八〇年第四期）という周恩来の情報工作を取りあげた文章を書いた。この文章によつて中共の情報工作の実態が始めて公開され、この方面に関する言論の扉が開かれた。このあとに書いた『隠蔽戦線総帥 周恩来』（二〇〇二年一月初版）は各種の記録を援用して書いた中共の特務工作の著書で、注意して使えば格好の手引書となる。

⑪ 陳立夫「参加抗戰準備工作之回憶」（《伝記文学》第十一卷第一期）

⑫ i 張国棟（文）原作「細説中統局」（上）、（中）、（下）（《伝記文学》第五十五卷第二、三、四期、作者の張国棟は、一九二八年から中統で特務活動に従事し、調査科助理幹事であった。中統局成立後、局本部科長、組長、秘書、内政部人口局第四處處長などを歴任、新中国成立後、江蘇文史館館員となった。張文の文章は上記のほか、ii 張国棟「中統從顧案血腥発家」『中統特工秘録』（江蘇文史資料第四十五輯）一九九一年 iii 張文「中統内幕」團結出版社 一九九五年十月 iv 張文「中統二十年」『中統内幕』（江蘇文史資料二十三輯）江蘇古籍出版社、一九八七年八月などに掲載されている。各版には若干異同があり、利用するときに注意がある。本稿はi「細説中当局」を用いる。以下、⑫—iのように略す

⑬ 54th Frederic Wakeman, Jr. "Policing Shang 1927—1937" University of California Press 1995. 漢訳『上海警察 1927—1937』上海古籍出版

社二〇〇四年、から転用、以下、フレデリック・ウエイクマン『上海警察』と表記する。なお、ここに引用する「消滅、共匪」紅隊暗赤経験簡述」の暗赤とは中国語大辞典（角川書店）によれば、方言（吳語）の暗赤赤で、暗触触のこと。秘密であるため漢としているさま、とある。

⑭ 蔡孟堅「兩個可能改写中国近代歴史的故事」《伝記文学》第三十七卷第五期

⑫ iと同じ

⑮ 前出 穆欣『隠蔽戦線総帥周恩来』中国青年出版社二〇〇二年 一五四—一五五頁

⑯ 中共党員が大幅に増大するのは、第一次国共合作が成立した二五年以後のことであった。

⑰ ハン・スーイン『長兄周恩來の生涯』邦訳新潮社 一〇〇頁 漢訳、『長兄周恩來和近代中国建設 一八九八—一九七六』中央文献出版社一九九二年 以下、邦訳による

⑱ 邦訳の「訳者あとがき」によれば、「著者は一九五六年以降、約六十回中国本土を訪れ、周とは十二回会い（うち長時間のインタビュ九回）鄧穎超には六回のインタビュを行ったという。もちろん筆者は、周恩來著作集や書簡集を始め大量の中国語文献に目を通し、一九八八年十月に天津の南開大学で開かれた周恩來セミナーにも出席して最新の論文や資料を収集しているのであるが、なんと言っても周夫妻から直接聞いた話をもとにしていることが本書の強みであろう」という。四〇一頁。ただし、このくだりは漢訳によった（一二二頁）。

⑲ 『陳賡伝』編写組『陳賡伝』当代中国出版社二〇〇三年 四一頁

⑳ 孟真「特務大師 顧順章」『中統特工秘録』所収 四七—四八頁

㉑ 特科については、周谷「六十年前潜伏在国民党心臓中的共謀」《伝記文学》第五十六卷第一期に詳しい。

㉒ 洪揚生「中央特科一科的工作情况」《党史資料双刊》第二輯

㉓ フイリップ・ショート『毛沢東ある人生』邦訳上白水社三一七頁

㉔ ⑮と同じ、六一七頁

㉕ 聶榮臻『聶榮臻回想録』上戦士出版社一九八三年 一二二頁

㉖ トマス・キャンペーン『毛沢東と周恩來』邦訳三和書籍二〇〇四年

五三頁

⑳ 周均倫・王紅雲「聶榮臻」『中共党史人物伝』第六十卷 陝西人民出版社一九九六年 九頁

㉑、㉒、㉓、㉔ 拙稿「公開された秘密党員（下）——楊度の入党をめぐる——」《立命館東洋史学》第二十八号を参照

㉕ 周恩來がまったく李立三の都市暴動に関心がなかったことについて、ディック・ウイルソンは次に述べている。「周恩來がモスクワにいて歓迎されていたころ、李立三はせわしげに自分で自分の首を絞めていた。ソ連の軍事援助を受けて大都市を奪取するという魅力的な計画をたて、紅四軍にまず長沙を奪取することを命じた。紅四軍は命令に従ったが、町を持ちこたえることができなかった。周はこれを聞いて、李立三は気が狂った」と語ったといわれている。ディック・ウイルソン『周恩來不倒翁波瀾の生涯』邦訳時事通信社昭和六二年 一〇二頁

㉖、㉗、㉘ ⑮と同じ、二三二—二三四頁

㉙ 聶榮臻『聶榮臻回想録』上戦士出版社 一一九頁

㉚ ⑮と同じ、二三五頁

㉛ ⑮と同じ

㉜ ⑮と同じ、二三五頁

㉝ 金鐘編『紅宰相——周恩來人格解剖』邦訳『人間・周恩來』原書房二〇〇七年 二三六頁

㉞ 一月三十日、中共中央臨時政治会議で中央軍事委員会が組織されると、周恩來は王明路線に協力することを鮮明にしていく一方で、自らの政治基盤を固めていった。『周恩來年譜』によれば、中央軍委が成立した翌日、中央政治局常務委員会で周恩來は軍委とソ区工作の責任者となり、この会議で上海、中央ソ区間の秘密交通線が開通したことを報告した。二月二十二日の周恩來が起草したコミンテルン執行委員会宛てた電報で、中国国民党はこの半年以来、李立三路線に反対する闘争、六届四中全会を召集し右派の党分裂に反対した過程と四中全会後の工作布置を詳細に報告し、コミンテルンの指示に遵守していることを強調した。三月二十四日、周恩來は中央軍委會議を主宰し、紅一軍、鄂東南ソ区の問題を討議し、国民党の第一次「圍剿」を撃破したが、第二次の「圍剿」を軽視してはなら

- ないと説いて、ソ区の拡大を強調した。周恩来はまた、敵軍工作を強加する原則を語り、「われわれが敵に進攻するとき、敵の内部矛盾（買収することさえできる）を利用して壊滅すべきで、これはつまり、われわれは次要の敵と暫時の軍事連盟を結成して、主要の敵を打撃すべきである。しかし、絶対にはかなる幻想を懐いてはならない」と述べた。三月二十八日、周恩来は中央政治局常委会で、鄂豫皖ソ区の問題を討議し、張国濤が向いて鄂豫皖中央分局書記兼軍委書記を担任することを決め、また中央常務の補充人員には羅登賢と聶榮臻を加えることを提案し、常委は向忠發、羅登賢、中央組織部長、宣伝部長、軍委參謀長の五人で組織することになった。これら一連の会議はすべて周恩来が主宰し、自らの政治勢力の拡大を謀ったことは注目できる。また、この過程で顧順章は李立三路線に反対する名目で周恩来に「小さい靴」を履かされるのである。（中共中央文献研究室編『周恩来年譜——一九八——一九四九——』中央文献出版社一九八九年 二〇三—二〇八頁）
- ④④ ②⑨と同じ
- ④⑤、④⑥ 拙稿「公開された秘密黨員——楊度の入党をめぐる——」《立命館東洋史学》第二八号
- ④⑦ ⑱と同じ、九九頁
- ④⑧ ②の拙稿「周恩来の誤算——顧順章事件の真相——」
- ④⑨ ⑱と同じ
- ⑤⑩ 張国濤『我的回憶』明報月刊出版社第二冊一九七三年八九四頁
- ⑤⑪ ⑳と同じ、五〇頁
- ⑤⑫ ⑱と同じ、二三五頁
- ⑤⑬ ロジェ・ファリゴ、レミ・ターファー『中国諜報機関』邦訳 光文堂一九九〇年 三二—三三頁
- ⑤⑭、⑤⑮、⑤⑯ ⑱と同じ、
- ⑤⑰ ⑵⑰と同じ、八九四頁
- ⑤⑱ ⑵⑱と同じ
- ⑥⑰ 蔡孟堅「悼念反共人張国濤」《伝記文学》第三十六卷第一期
- ⑥⑱ 『中国現代史辞典——人物部分』近代中国出版社 一九八五年六一九頁
- ⑦⑰ ⑵⑰と同じ
- ⑦⑱ 王光遠『紅色牧師董健吾』中央文献出版社 二〇〇〇年八〇—八一頁
- ⑧⑰、⑧⑱ ⑵⑱と同じ、一五一頁 漢訳一五六頁
- ⑨⑰ ⑵⑱と同じ
- ⑩⑰ 陸揚守「周恩来逃入赤区」『現代史料』第三集下編海天出版社 中華民國廿三年三四五頁
- ⑪⑰ ⑵⑱と同じ
- ⑫⑰ ⑵⑱と同じ、および黃凱「我的特工生涯和所見所聞」『中統特工秘録』（江蘇文史資料第四五輯）
- ⑬⑰ ⑵⑱、具体的に各自がどのような任務についたのかは、秘密工作であるから探索の仕様がわからない。しかし残された回想や評伝から軍委の周恩来と聶榮臻が中心になって作戦が立てられ、上海で現地の武漢軍委を執行部隊として指揮した。現地の情況は李強に伝えられ、李強は聶榮臻に報告した。上海には陳賡、李克農らが待機し緊急の事態に備えた。周恩来はこの他に、南京、天津に秘密工作員を国民党に情報本部に潜入させ、国民党側の動向を探索する体制を作っていた。南京の国民党本部に潜入していた錢壯飛の動向については後に詳述するが、錢壯飛とは何者であるかについては、拙稿「ある追悼文——西安事変前後の周恩来、張冲そして潘漢年」《立命館東洋史学》第三十二号 二〇〇二年）で詮索したことがある。
- ⑭⑰ ⑵⑱と同じ
- ⑮⑰ ⑵⑱と同じ
- ⑯⑰ ⑵⑱と同じ
- ⑰⑰ ⑵⑱の黃凱前掲文と同じ
- ⑱⑰ 孫曙「顧順章後妻張永琴訪談録」《文史精華》二〇〇三年五月 総一五六期「公安史」作家の孫曙は、九一年十一月、武漢党史、図書部門で当時の関係資料を調査し、また中共鄂南特委書記、長江局交通の陳霖を訪ねて材料を集め、顧順章の逮捕前後の状況に関して通説と異なる事実を見つけたという。孫曙によれば、真相は次のようであった。
- 「一九三一年四月一日、張国濤、陳昌浩と顧順章らの一行は、それぞれ上海、南京から輪船に乗って四日に漢口に到着した。八日、張国濤、陳昌浩は陸路で鄂豫皖ソ区に赴き、顧順章はそのまま武漢に滞在し、特科の張增謙と宝華街偵緝処近くの怡園傍らの「世界大旅社」に住んだ。

一九三〇年十一月、中共武漢市委書記であった尤無魂が三十一年一月に逮捕されて叛変し、名前を尤崇新と改め、楊慶山が処長、蔡孟堅が副処長であった武漢警備司令部稽查処の密査員となった。中共漢口行動委員会の宋恵和は三十年九月十六日に国民党憲兵三団に秘密裡に逮捕され、叛変後、名前を周大烈と改めて密査員となった。憲兵三団が南京に移動すると、周を武漢警備司令部稽查処に移して密査員にした。三月、蔡孟堅が武漢行営偵緝処処長となり、周大烈、尤崇新らも偵緝処に来て特務になった。久しからずして、偵緝処は尤崇新、胡士林が反共後にまた反水^{うらみ}して、共党の組織活動を復活しているのを糾明し、尤、胡を行営軍法処に押送して銃殺することにした。周大烈は尤崇新のために蔡孟堅に懇願した。胡士林一人だけを銃殺さえすれば、他の者を戒めるのに十分です。尤崇新は共党滬東区委書記になったことがあり、共党幹部をたくさん知っています。殺すと無益であるばかりか反共工作に得になりません。このあと、周は「不殺の恩」で、尤に功績を立てて罪を償い、積極的に反共に努めるよう脅迫した。

四月二十四日、金曜日の午後、六人の緝務員がそれぞれ尤崇新、周大烈の背後に付いて、漢口の江漢関あたりに来て、革命人士を見分け、指差して逮捕した。午後四、五時頃、緝務員は尤、周を連れて偵緝処に帰る準備をし、当路の三教街西側の二馬頭^{ふとう}をへて三陽路北冷落角の阜昌街付近に遣って来た時、尤崇新らは映画を見終わって出てきた顧順章、中共中央軍委駐漢口交通站长張崧生とばったりであった。この張崧生は後に張曉行と名を変え、五十五年重慶市中級人民法院において反革命罪で有期徒刑六年に処せられる。張は尤崇新の背後に六、七人の人物がいるのを見て、情形がよくなく、様子がおかしいのを知って、同時に歩くのを速めた。この二人を君は知っているのか？ 緝務員は顧順章、張崧生を凝視して尤崇新に訊いた。尤はうなずいて黙認すると、緝務員はどっと押し寄せて顧、張を逮捕した。解放後の尤崇新の供述によれば、私が滬東区委書記であった時に、張崧生は上海で中央江蘇省委機関に住んでいて、毎週の区委書記連席会を開いた時に張と会った。省委はかつて顧順章と私を打ち合わせに派遣して会い、滬東区のある叛党黨員を調査したことがある。私は顧が党の保衛工作の責任者であるのを知っている。

その後、緝務員は「世界大旅社」の顧が泊まっている部屋を搜索し、数件の文書を押収した。旅社の二階の部屋で張増謙を逮捕した。偵緝処で、緝務員が顧順章に用いる刑具を準備していた時に、周大烈が知らせを聞いて飛んで来て制止し、顧を処長弁公室に案内し、私は顧先生が早く転変されることを希望します」と考えを表示した。顧は周にこう言った。私の転変工作はすべて上海にある。自からが上海に行つてできるのだ。君たちは決して私が逮捕された消息を南京に告げてはならない……二十五日の晩、蔡孟堅は南京の中央調査科科長徐恩曾に六通の「徐恩曾親訳」の密電を送った。四月二十七日、三人の緝務員が顧順章を「江新輪」に乗せて南京に押送した。

上の孫曙の論説は本文(三〇七—三〇八頁、三二—三三頁)で取り上げた蔡孟堅の蒋介石暗殺未遂事件の記事と少なからず照合するところがあった。蔡孟堅がもつとも信頼した助手の宋恵和が後に名前を変えた周大烈であったこと、その周大烈が再度反水^{うらみ}した尤崇新を死地から救い、ともに顧順章の逮捕に貢献する。だが、宋恵和は何故、蒋介石暗殺未遂事件の主要犯であった尤崇新に謀殺されそうになったにもかかわらず、彼を銃殺刑から救出したのか。逮捕された顧順章を何故、拷問の訊問から救って優待したのか。顧順章事件の背景に宋恵和(周大烈)が尤崇新の背後で重要な役割を果たしていたことが判明できる。

⑦⑤ ⑥②と同じ、八六頁

⑦⑥、⑦⑦ ①⑥と同じ、三五—一頁

補注1 瞿秋白の遺書『多余的話』は、いま、「言わずもがなのこと」と題した丸山昇訳が『中国現代文学選集17 記録文学Ⅲ』(平凡社 昭和三十八年)に収録されている。ただ、訳者の解説によれば、この遺書は国民党当局によって改竄されたもので、瞿秋白はけっして転向したのではないという。この巻にまた楊之華の「回想の瞿秋白」を掲載している。楊之華はここで瞿秋白の党に対する誠実な忠誠心を切々と語った。選集に収録された小説、記録、回想は今日においても現代中国を知るうえで貴重な資料になり得るが、それぞれの解説は当時の中国認識が色濃く反映されている。瞿秋白が国民党に逮捕されるのは中央根拠地の紅軍が国民軍に包囲され、ほうほうの体で西方に向かって逃げ出したときに、瞿秋白は肺病に罹つてい

る病人という理由で「长征」から取り残された。党員にとって、とりわけ瞿秋白路線の指導者として党中央を担った党の幹部が逃避行とはいえ党中央、主力軍から取り残されることは敵の真っ只中に放り出されるに等しかった。瞿秋白は敵の包囲網をかいくぐって逃走した。瞿秋白が国民党に逮捕されたのはこのような経緯があった。転向する理由は瞿秋白には十分あった。転向でなくとも中共中央、コミンテルンに対する不信感は拭うべ

くもなかったのである。妻の楊之華は瞿秋白の死後一時逮捕されたが、中国共産党の組織の中でずっと生きてゆく覚悟をした。党とともに生きてゆかなければ、他に生る術はなかった。だからかの女は以後、党の意向どおりの文章を書いた。

(未完)

(衣笠総合研究機構特任教授)